

白菊計り片付かす

罪なき芥子のあまし兼

雲の氣色を見ル小舟

青田に落て浪の立

落葉の送る神の旅

宮富

眠りを覚ス千代の鶴

ウ

祠に届く波の花

添へて湊に懸ル船

暫し留ル夏の月

貧イ家のしらへ琴

矢文

今にも高き功の弓

関の戸ノメてする朝寝

後ロ手に來ル雨の脚

計弥

雨はと見ゆる今朝の雲

磯の寒サの暮懸り

丸扇の負ル夕涼ミ

落葉樂ム友白髪

月は湖水の雨に消へ

さらす鳴キつる時鳥

月に雨持ッ雲のてい

新しゆ聞く飴り竹

翁見飽ぬ夢覚し

社の古き寝て思ひ

漕付て來ル闇の船

濱をはい行夕煙り

尾の上の鐘をまとわして

ノ三百貳句

勝二十五

末五ツ

俳人

ウ

月と花

はるの色

夕がすみ

露しくれ

鳴ク衛

ひかるほし

相ごたつ

行脚僧

つゞく眠り

高か屋敷

菜の盛り

冬の音

操返し

啼雉子

あて芝居

右十五題

為吟いたし候兩俳の様ハ當時行れ不申間とり
不申其譯ハいつれ御目ニカゝり候砌御断可申
候 嘉敷

二月十三

評者 南鵬

浪塗御連中

ウ

昭和四十九年度『研究年報』第三号の正誤表

一二頁上段 十四行目 飛彈守→飛驒守

一三頁上段 八行目 霧施→霧旅

二八頁下段 十七行目 宇内→富田(ママ「うわえ」の誤写也)
(H高次吉氏の御教示による。)

一四頁下段 () 内に興正院の葬られた福昌寺を

尋ねてみたい旨述べたが、福昌寺は俳仏毀釈により

現存しないのでお断り申し上げます。

若竹になく雨蛙

無欲に申ス念佛初メ

見事に見ユル鶉の篝

一足くれて立ッ螢

親より先に渉ル川

楽石おもふて笑ふ梅

心置すに渡ル蟹

世も静かなる瀧伝へ

迷イの道は外ニあり 義心

我が足元もあたに踏 ウ

蛙鳴かせて獨り言

小雨耳立ッ瀧の音

己か有所を名乗梅

花見ておらす下タの國

網船の競ウ蕎麦の花

泣く子に外トを見スル母

雨間も重き五月空

螢も雨に叩かれて

足にもつるゝひきの声

おくるゝ道をせかむ孫

ほいろ掛ケたる螢の火

月高し

旅に妻乞ふ郭公

美容に乗せて見ル置坐

日積り外カの道を踏ミ

恪氣の訳の澄て消へ

直ス置坐は塀近く

芦の緑に遊フ船 田幸

虫の音更ル苺穂守り

所忘るゝ船遊ヒ

湊戀しひ有りくゝと

何所から見ても丸シ丸ウ

きぬたに替ル雁の声 吉尾

庵の畳も古ルめかす

星は何所へ遊ヒ行

覗けは峰の松黒し

隣りの門に笑イ込

別レて戻ル宵の客

秋見に出タカ川の辻 ウ

吞よその酒あり次第

寝所に日操夫の留守

濁る心の清ム今宵

涼しさ餘ル庭の更

山端の船も浮キ上り

医者と子添と入替り

待宵くらき雲の晴レ

詠メも允ル三笠山

初霜招く芦の花

棄ぬ雲はありてよし 矢文

続く眞砂に垢付す

愛し孫が獨り道

何所も人の我を忘レ

片山影を乗り越て

覗けは近ふ井戸の中 10

居並フ縁に匂ふ蘭

何所に隠レて夜の明

苦のない道を笑イ合 計恵

一ト宿越して荷を解せ

波から波の眞峠

光りくゝとはけ頭マ

松の音

時雨は走ル鳴の暮

日受の邪魔に成ル柳

都の春に身を委ね

柳の招く二階窓

豊の秋の夕ふ涼し

空は動かぬ糸すゝし

今朝の茶の香に聳ぶり

若氣に障ル今朝の文

藤に柳のもつれ合イ

忘レかたみと散ル桜

幡の手見スル朝ぼらけ

声も耳立ッ船別れ

ぬゑの呼出藪の月 ウ

打したがふて立ッ煙り

柳のやせし庭掃除

豊に見ゆる出穂の秋 吉尾

明ケて入レたい夏坐敷

雲の色引立ッ煙り

女さゝに覺ル寢屋の窓

浪を枕に春の海

柴に鼻つく百合の花 宮富

世に降ル雨の花の色

荻の夕部の露に勝チ

柳は長き詠メもの

柳蚩の火て見へる

揃唄

ごみを拂ふて踏青 ウ

催合の船は嶋の春

花見の幕の野に余り

姉は首振ル艶か出来 琴風

早乙女綴ル初田うへ

寺子の勇ム屋祭り

よしあしゑらふ親心

掛絡も浮レて踊り出

老の手も鳴ル従弟どし 計弥

客には曠ナ馳走ぶり

手まめおの子の拍子ぶり

もん日拾ふて茶屋遊ヒ

身苦は祓て茶摘連レ

田舎も今日の曠レ俄か

快氣浮スル花の下

酒の湊に浮ク調子

摘手も白き宇治娘

姫ぶり作る春乞食

春を踏マヌル快氣酒

姫も姑に進メられ

神風含む初ッ田うへ

氣は乱レても三味の艶

眞の闇

時鷄任せに走ル船

螢の月の裏とはら

泣く子驚しに出ルうら戸

残ッた弓を持って起

傘出て見れハ雨一ッ

妹に恥ル手水の間

鳥の声に替る霧り

坐頭に負ッ道比ゴ 田幸 8

船引ク跡の浪光り

見ゆる社の燈一ッ 湯寺

今盲目の憐知る

消ス燈し火相圖やら

さても静かな年の暮

浮かむ硯の月しらす
 降出ししらぬ雨を聞キ
 夢の境に鳴く鳥
 枕の間に手を隔テ
 月花寄スル誹の友
 戀の一念暮レ懸り
 膝に笑抄の狝が鳴キ
 俣ならぬ茶の來タ其夜
 植置く松も佗住居
 姫に草鞋の夕時雨
 羽織の紐の小モなり
 硯の水も研干テ
 旅の夜すから親の夢
 笑イ揃ハぬ去レ妻 吉尾
 船は心の俣ならず ウ
 明日の師走の來ル寒サ
 身の丈ヶ先に越ル欲
 人は見物の花曇り
 二度の咄に氣も付カス
 目出度イ中の人か減り
 産ぬ先キに譲ル家法

懸ケた言葉もあだに成り
 書盡されぬ筆を留メ
 闇のこなたに鳴く鳥
 追掛テ
 蓑笠取レハ別なもの
 尾ふる女犬を見て戻り
 手柄の鷹の手に戻り
 相イ宿頼ム旅しる人 5
 岩をも通ス忠の仇
 馬の尾結フ野の時雨
 相傘を笑イ込メ
 驚も立せず夕時雨
 打ても足らぬ蕎麦の客 田幸
 届く真実笑ふ芥子
 返しの哥に矢をとゞめ 田幸
 元の手に来ル放し鷹
 風の力らの見ゆる雲
 口に付キたき殿の馬
 天窓打るゝ螢狩り
 旅立留る母こゝろ

馬子か綱とる春の駒
 歳も苦にせぬ若心
 羽音も猛し鷹の勢 吉尾
 塩梅よふて取りに來タ
 顔見ぬ先につきそふで
 下女も笑抄にしずを取
 袂握レば出す土産
 又伝テ添ル古郷の使者
 門出祝の只と只
 見れば本望の敵打
 尋て見たい子の行衛
 言葉のなまり子にしらせ
 神酒を進ムル都客
 雲の走ルか月の弓
 靡く風
 なぎさ隈とる花の浪
 花の手を引青柳 6
 月のそよつく稲の浪
 四海は君の名を觸て 斗恵
 若竹になる燕らメ

戸に來ル蜂の巢に戻り

裏戸を叩ク桐一葉

未タ鶯の深山住

陣屋の旗のかち上り

樂ム梅に今朝の春

落葉は星の舟と成り

稲葉動ず月の出々

いかり声聞ク盆の月

社舞越すいちよふの葉

虫の音を引宵の月

切りかへふせの破レ障子

早ふ届いた一ト葉船

稲葉なみ寄夕氣色

未タ秋若し粟のいが

夏花を持って落る露

さやかかの笹をこル月

今朝置かへし萩の露

吹戻さるゝうちわ賣宮富ウ

松も闇夜の音に成り琴風

太ツきな雨を連して吹

寺子の拾ふ桐落葉琴風

2

さゝ洩ル庭の月涼し

稲葉の浪をわたる月

そふめんの味薄ふ成り

吹さまされし旅の夢

夕納涼

走て見たる風車

只は居らぬ雨後の月

髪の香散らす奈良丸扇

風の届いて笑ふ沢

歩ミ定メて見ル花火計恵

一人リ呼して時か知れ

粒吹分ル洗イ髪

相惚覗く垣一重

橋の月迄蚊に追レ

青葉の峰に月半バ

置坐を返す須磨の客

海なき国の船に乗り田幸

誘ふ戸口の笑顔どし

月は嵐の誘イ來て

盃に浮く月きよく

3

螢て渡る竹の橋吉尾

蛙啼く迄更テ有

猫も置坐の人数ニ入り

丸扇に藤の花田シ子

月を坐敷の蘭ニくれ

笛の音を引起り風

子にせかまれて螢笹

俗衣も自立ッ橋の月

道芝問ウて來ル坐頭

客より先にはいる門

風呼山にうそを吹

唄笛とりに子か戻り

月に敷カル、茶の薫り

習イ廣ムル時行唄琴風

もの案し

竹糸乱る旅の留守

花も後ロに去られ妻

いとゞ蓬の秋の雨

暮ル戸に立ッさられ妻

勇ムル花のあだに散り

4

俄寄

※本書は薩藩の雜俳と確定するにはいたらないが水俣地方に伝存する周辺資料としてとりあげたものである。

本書は熊本県芦北郡芦北町の竹本鼎氏蔵。

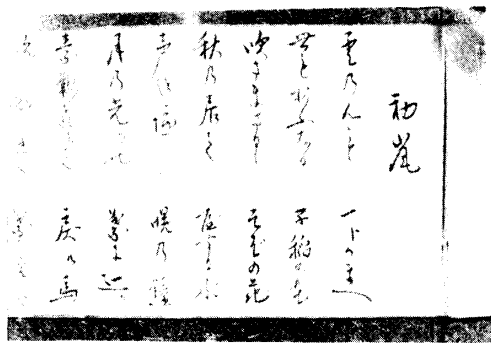
縦十糎、横三十九糎、全十三枚。表紙中央に

「俄寄」、左下に「浪塗連」と墨書す。十二

才と十二ウには詠者南鵬の朱筆の記事あり。

筆録年代、南鵬なる人物等については未詳。

(福山武徳記)



戀の木戸

花に名残を残ス曙

嘶しの残る落葉音

琴風

楽石に便る螢籠

我か飼ふ犬か吠て引

馴過て出る狝の鈴

置た刀は闇に失セ

何所から明々夏氣色

我影ながら細ふ成り

今待チ兼る月の入り

うつら〜に出ル月

理智に溺れて濡ル、袖

別れて跡の蚊を覺へ

暮に風待ツ曠湯形

吠來る犬も呵られす

1

宵月入レば動く竹

迷ふ坐敷に瘦ル癖

相凶の笛の聞キ所

角を隠サぬ鬼もおし

姉の螢は訳に飛

宮富

帰るさつらき夏の明

飽ぬ今宵の月の更

血孕ム迄の蚊を凌キ

人声すれば取ル螢

三日の月影まつ柳

吠たる犬の告ル首尾

母に錠まへ預かられ

柄足のむねに飛螢

忍フ身寒き菊の影

ウ

初嵐

雲の心も一トかまへ

世も安ふなる早稲の花

吹さまさるゝそばの花

秋の居て屋する水

声を隔ル曙の鐘

月の光りの葉に迂り

素鞍飛せて戻ル馬

跡に散り継ぐ葉も見へす

瀧も斜に替ル音

青葉促ス秋の艶

紅葉も未々青二才

M'AG' 高松の影に円座の桜見酒 如
 O'AO 香をさして蜂の挿や花の蜜 飛
 Q'AR 鯉釣の餌ハ曲輪洩の恵美須金子 如ウ
 I'AE 鶴翼の雁の備へを浮御堂 風
 O'AJ 朝日さすいやか上野の桜見傘 窓
 Q'AR 御味方はちらぬ桜の古野御所 風
 P'AG 寄貝に満込む孫や三浦の賀 窓
 F'AE 同意せぬ身ハなし井手の山吹見 風101
 F'AE 人浪を立る桑名の渡し守 東風
 U'AG 熟すれハ穂をつむ秋の稻雀 梅山
 S'AR 枅形の人数を計る兵糧米 東
 F'AE 訳有りて戸さすや関の人煙り 梅
 T'AG 万石の年貢の人も計られず 東ウ
 F'AE 売買イの欲に更行除夜の市 風
 M'AG 富士の雪裾ハ黒ミし狩の勢子 風
 T'AG 時ならぬ鐘の音烈し撞木町 風
 F'AE 春の香の庵に圓る花の塵リ 嵐
 F'AE 猪牙船の涼ミ鄙鳥都鳥 風
 U'AG 雨祈念一ッ気になる雷の音 窓雪
 M'AG 仇打の見人や碁盤の膝を興ミ 窓
 Q'AR 今宵しも広沢のせく月見呉座 窓

Q'AR 御涼ミの供挑灯や蛭沢 風
 T'AG 坊中ハ幾千人や曼陀羅会 窓ウ
 Q'AR 三浦屋か百むつかしき朝茶時 掬
 M'AG 鹿垣を結ふて柴田か屯勢 窓
 S'AR 初午や人をたまかす手妻取 掬
 U'AG 蕎麦屋客内から外トの砂場迄 鶴
 M'AG 天満忌やこハにも地主の花筵 窓
 P'AG 待請て今宵賑ハし星迎 嵐
 T'AG 維摩会の間逢ひに焼く奈良茶碗 窓
 O'AJ 山科に閑談積る夜の雪 嵐
 I'AE 凧や野飼の馬の暖ク溜リ 風
 U'AG 稻すハめ蛤門にふくれけり 嵐ウ
 F'AE 垢ものふ背中すり合女風呂 子
 T'AE 心中の森を轉る村烏 窓
 T'AE 雷電の舞台に人の鳴リ渡リ 子
 O'AJ 洩の捨子人しがらみと成にけり 窓
 I'AE 鳳闕や染齒栄卸す鶏合 子
 V'AG 白簾の下に黒ミし鎧武者 窓
 T'AG 枅形にこぼるハ米の賀の祝 掬水
 T'AG 華見寺貴賤法師の雑煮汁 窓
 F'AE 石山や式部小町も源氏の間 窓

F'AE 緋威の透間も見へぬ花の陣 窓
 F'AE 鞍屋の賀に三曲の打揃ひ 子
 M'AG 雁の行乱れてさとの敵の色 窓
 W'AR 楽屋まで人の湧込姥が酒 子
 X' 昼寐して蝙蝠が洞ラ別世界 鞆
 Q'AR 貝踏や渚に満る遠干泻 窓
 I'AE 火に踊る鰯や須磨の月今宵 窓
 M'AG 一声を十哲聞や時鳥 子
 T'AG 説法の声も通らぬ極楽寺 半
 O'AJ 人の浪桜に満込小塩山 窓
 F'AE 祇園会や纒に残る蟻のたね 半

比如月鳥

卯風(印)

ウ

点揚之式

一 五百五十点
 一 五百三十点
 一 四百九十点
 一 全
 一 四百九十点
 一 四百五十点

以下略之

元治二年丑初春日

流巴雅丈ウ

清書堂

石な取るとはしら浪のおぼことも 風一
 翁忌に十哲濡るゝ袖時雨 桃一
 刈時の粟や雀の関ヶ原 風一
 月花の友や三十六歌仙 桃一
 あきれ見るいんの奥庭人の骨 風96

日にきらぬ兜は昼の星月夜 来風
 彗キ星出て月郷の曇り合 不流
 時ハ今膳所ハ江鮒の甑キ立 来
 馬艸刈子の首引や小松山 不
 牧狩の不二野ハ獾の料理茶屋 来ウ
 雲水ハ大津の寮の何仏 卵
 鶴翼の備へを畳む桜の陣 桃
 軒に巢をくふや箒キの蜂叩 卵
 打込し霜塊リや鯉の網 桃
 獲物囲ふ人參畠の虎の番 卵97
 婚礼の酒に鮫洲の花の酔 桃林
 四方山の咄し木質シの夕鳥 風林
 瀬に付て釣りの盛りや桜鯛 桃
 真丸な天窓の数や月見寺 風
 見物も巢籠る舞や鶴か岡 桃ウ
 鸞鳳も其徳に入る格子門 柳
 投扇の賭ヶに馬入の富士額 柳
 渦ッの廻ふ買人や河岸の初鯉^{巻主} 柳
 千疋の絞リ売リ切る馬の市 柳
 遠乗リの水飼ふ井戸の星栗毛 柳98
 鶉の真似の鳥なかるゝ川普請 桃林

後世送る茶毘の夜に立ッ人煙リ 卵風
 戦死せし靈や蛭の関ヶ原 桃
 朝寐する種子を田毎の月に蒔^{巻首} 卵
 人霞弥かうへ野の桜狩 桃ウ
 高く泊る伊勢講宿や江戸鳥 飛
 猪牙船に耳たつ声や川開 如
 生マ息に僧も雑魚寐の聖天会 飛
 白簷の影に黒ミし東勢 如
 操リ船の競渡や老と若狭町 飛99
 引鶴の干瀉に霞む琵琶の湖 柳風
 狩に呼ふ幕の裾野ハ富士額 柳風
 鬪鶏に幾羽重ねの百千鳥 柳
 瘦馬の外は輝く星月夜 柳
 明恵忌に立る茶煙リ人煙リ 柳ウ
 開帳の日ハ釈迦堂も人畳 梅
 国々の垢をあらひの番所 東
 神無月残る神なく大社 梅
 一寸の皿駕籠透ぬ天満宮 東
 西海に沈ミもやらす平家蟹 東
 貧の仇切る鎌の手や陸奥の稻 如水
 涅槃会の掛画に似たり猷町 飛羽

KAD	讒奏に浮ふ瀬もなし左邊船	全	B'AD	天窓の疵に付葉	風蛙	PAD	仇に打込陣太靴	全
GAB	日ニ増して内様の身の下蔽ひ	全	W	ね枕髪に入れ齒黒	全	PAD	身も忍出る蘭の垣	全
UAD	兜をも抜きて地に這ふ平家蟹	全	BG	組合ふ中に入れ刃金子	全	RAD	香を引犬の茅潜り	全
FAD	傾きし城も明智の三日の月	全 88	JAB	悪縁に成る子の涙	全	Q	龍宮の使イ二位の尼	全ウ
FAD	緋牡丹を不意に散らせし留主の雨含風		N	叫聒角力の中に入	全ウ	KAD	紅葉見に来る鳶の門	卷頭流巴
MAB	猿の子は家を放れて山栖居イ	全	EAB	獅子の飛出る小柴山	流巴	B'AD	岩戸を出る日の鳥	全
RAD	縁輿の中を横矢の違イ鷹	全	FAD	落人隠す奥の門	全	KAD	雲の上漕く月の船	全
S	初花を人に喰れし梅の実子	全	GAB	塵を吹去る風の骨	全	EAB	立華を覗く金屏風	全
AAD	白二重の餅に入れはの齒か立たす	全ウ	RAD	土の牢まであきの月	全	EAB	雪にも盛る孝の竹	全 93
V	片桐落て世の跡を泣キ時雨	竜尾	PAD	天の岩戸の神詣テ	全 91	KAD	境を潜る土龍	含風
Y	東西分る大関取て投挙シ	全	JAB	膀は潜れと漢の御代	含風	RAD	傾て行く月の舟	全
S	二ッ世の契りを盗む一夜妻	全	I AH	菟道急く医者 <small>の</small> 駕籠	全	I AH	土手の花見の迎ひ駕籠	全
EAB	先陣も水に浮かれて後れ太刀	風蛙	EAB	犬牽廻る繫き狩	全	JAB	近道を行桜の山	全
EAB	足すりも運の尽にし喜界嶋	全 89	AAD	中か月代の児桜	全	EAB	治る御代の弓袋	全ウ
	押し分けて	ウ	UAD	竹の山より尾長猫	全ウ	EAB	踏て出たる虎の狩	竜尾
RAD	粟津ヶ原の鶉狩	含風	KAD	忍ふ身延の境垣	一睡	EAB	骨の碎る角力芝居	全
JAB	山道迷ふ鹿躰ひ	全	GAB	綴にさわる茅薄キ	全	S	叩きてあけん妾の門	全
I AH	覗く一間の二面テ	全	AAD	焚燗開らく舞ひ戸口	全	FAD	雲をさへ切る舟の道	風蛙
CAB	襖か邪魔や相枕	流巴	JAB	太臣入子の汐丹荷	全	I AH	雪の輪潜るゝ木曾の山	含風 94
FAD	木槿の垣を放れ駒	楽山 90	OAD	罌打し両靴	全 92			
			S	危ク見得し後立	風蛙		甲乙分之	

N	ふりに来る天気祭りの雨の客	全
GAB	俄客餘多弾手の琴の浦	全
KAD	鎌倉の日和も晴て鯉釣り	全
D'	初雪に叩かれ山も笑ひ只	全ウ
MAB	蔭法師機関る蝦夷の鱗祈念	一睡
KAD	宿ッ坊の疱瘡の夜伽の歌かるた	全
OAD	湯上りの非番の官女貝合せ	全
RAD	擦りし手に手をもミし通夜の紙	全
MAB	佛狼 ^{フラス} 盗の見舞ひに菓籬 ^{カサ} 佛めかす	全 82
N	免の狩に穴に追鳴の間伏立	風蛙
EAB	天窓から濡るゝ時雨の曲輪の雨	全
BE	乞飯の貰受たる鮮の味	全
B'AD	初咄出合ふ一間の歌かるた	全
Y	掛樋より水車で廻る影人形	全ウ
RAD	不意に取る相撲も得手のかわつ掛 ^{巻頭} ヶ	流巴
KAD	布団着て聞も珍らし蟬の聲	全
PAD	おし掛ヶの客も風雅の種子瓢	全
IAH	難題に不意を打たるゝ善良か背ナ	全
MAB	乞喰の昼寐の伽や虱狩り	全 83
A'AD	俄客押掛ヶに来る桜鮓	含風
EAB	座煙管を風味利キに出す煙艸盆	全
X	雪の袈掛ヶて投打須磨の姫	全
T	ふりに来る鮎 ^{アサギ} 売り勢田の鱧飯	全
IAH	蛭子 ^{ヒルコ} 講に出逢ふ酢売の舞扇子	全ウ
N	夕涼ミ言ひ合たる山羽月	竜尾
JAB	淋しさと暮し兼居る和歌の文	全
Y	噂する問来る中の熨斗の樽	全
EAB	目覚しに弾ヶハ問ひ来る琴の客	風蛙
PAD	敷鳴の道に飛来る友千鳥	全 84
残念く是は残念		
OAD	花桐も散る諫言の逆時雨	含風
MAB	城揚る咽も乾らめく赤穂塩	全
A'AD	落腰は立えぬ平家の破れ簾	全
IAH	関と取る相撲も水に吐かせられ	流巴
B'AD	若武者に穂首揚らぬ老の鏝	樂山 85
V	汗のこり足も進まぬ老の坂	風蛙
EAB	業鶏の不意に打るゝ深手負	全
N	口惜き齒かミも仇にくひ迦 ^{逆カ} し	全
KAD	関取の負る土俵の踏迦 ^{逆カ} し	全
IAH	願望の解る水も水になり	全ウ
CAB	喰責に逢ふ籠城の勞れ武者	流巴
JAB	和歌の座に無筆恥かく文字の闇	全
MB	蜘蛛の糸かけられて蝶は羽を休	全
FAD	継母に背中打るゝ小夜碓	全
RAD	梅飛ひし跡に来て鳴く子鶯	全 86
UAD	妾腹の子は鶯の藪栖居	含風
RAD	能き中の片羽もかれし鶯の床	全
Q	草の仇取るや齒嚙は跡五年	全
IAH	寐ッ起ッ広き一間の妻の蚊屋	全
A'AD	叩き出す妾か日照りの妻戸口	全ウ
IAH	御脳にも物うき鳴の沖のいし	一睡
Q	讒言の口舌に鮭のかす喰ひ	全
A'AD	運貂に命もつきる地籠の鴛鴦	全
UAD	須磨を横に汐ひたゝれの兜蟹	全
S	破れ笠を辞世にさし出す二位の尼	全 87
V	流矢に落る新王の運も尽キ	風蛙
A'AD	梶原か讒に落行蝦夷の嶋	全
B'AD	親の仇忍ふむかしの水のくき	全
N	打込た一手の先に後れ石	全
S	初枝を人に折れし梅の花	全ウ
IAH	頼ム蔭なくて蝦夷まで落葉月 ^{巻頭} 流巴	流巴

UAD	石に有火を般若寺	全74	AAD	丸ひ中売角の茶屋	柳風	葛之門 全	
OAD	こけて罰なし琵琶法師	柳風	S	飛れぬ旅の羽抜ヶ鳥	全		
KAD	顔ニッ見る鏡餅	全	MAB	出口の広き酢屋の壺	全	流巴79	
JAB	火牡丹わくる角屋敷	全	MAB	不自由と成頭無釜	全		
AAD	約束たらぬ月見客	全	RAD	片目で渡る眼鏡橋	全ウ	鳥渡した事か楽ミになる	
OAD	秘葉て鼻の焼ヶ居り	全ウ	RAD	瓦の鬼の拾ひ首	流巴	鎌倉に出合ふ遠馬の乗廻し	
AAD	崩す出丸の角屋敷	楽山	KAD	片輪の車廻されす	全	KAD	晴れ日から汲玉川の登り鮎
KAD	痛む臼歯の奥の院	全	FAD	落歯ハ土に伽羅の下駄	全	GAB	取組の能き行摺の立角力
EAB	磨く水晶の玉細工	全	OAD	片枝生る梅の舍利	全	Z	赤貝の天窓も濡るゝ湯屋の土器
MAD	生歯を落す高野槇	全	IAD	地獄に落し鬼瓦	全77	PAD	大坂の人に出丸の茶屋遊
MAB	童子割出す甕の水	全75	MAB	片割れになる姥か餅	含風	OAD	竹馬同士駈込茶屋のうなぎ飯
GAB	滝見に鹿の落し角	飛羽	N	責メて貰ひし膳所の鮎	全	EAB	東西に分る稽古の角力配
PAD	悟る法花に落葉月	全	X	茶白山見に引キ同士	全	EAB	初雪を娘か背中に不意に打
BAD	乙矢て兄の片矢筈	全	S	片羽折られし閨の鴛	全	FAD	廻り逢ふ寐屋に解たる縺子の帯
GAB	子共ハ根から竹生嶋	全	V	関守の引ク不和同士	全ウ	MAB	長雨に日和神楽の祭り酒
UAD	焼出す妾か黒茶碗	全ウ				UAD	目の覚る蓮の匂や達摩堂
PAD	落し肥前の響焼キ	全			(印)	BAD	更ヶて来る客の馳走に琴を弾キ
RAD	富山も咲や花の兄	全			卯風	FAD	明ヶて見る四方の梢の六ッの華
KAD	汲れぬ井戸の水	全			78	IAD	千代か宿問へハ蚤取る蚊屋の外
PAD	なか齒ハ落し月の蝕	全			ウ	RAD	様々の凧も飛立つ浜屋鋪
AAD	仇折れ口の桐一葉	全76				Y	湯上りの裸か角力や貝合セ
				元治二年正月			含風

V	もて遊ぶ童に吹や国の風	全					
FAD	鳳門の開く玉座の鳥合	全 67					
GAB	目印ハ巴の紋の富士額	柳風					
PAD	相惚れハ目色をうつす十寸鏡	全					
KAD	夜桜に心開きし旅衣	全					
UAD	大蜂を書し <small>巻</small> 絵の小盃	全					
CAB	五月雨の菖蒲に旅の足を留メ	全ウ					
MAB	蜂の巣やかかけし出丸の冬籠り	楽山					
EAB	初旅にいと珍敷相撲芝居	全					
FAD	灘廻り磯に高木の八重桜	全					
PAD	立寄し飛脚に匂ふ茶屋の梅	全					
Y	殿くさき娘か部屋の後陰	全 68					
PAD	邯鄲の枕語らぬ春の閑	飛羽					
X	何事も耳なし里に各籠り <small>(ママ冬)</small>	全					
KAD	方丈の木蔭に咲や女郎花	全					
GAB	鶯の通路を鳴梅屋敷	全					
RAD	仏壇ハ砂羅双樹の絵天井	全ウ					
PAD	仏にハいわて花散好王寺	全					
CAB	偽を書とも目にハ雑紙本	全					
KAD	名物ハまた初旅の吾妻茶屋	全					
Y	消て行子共争論遠ふ霞	全					
EAB	番頭も岩城か所帯銭と米	全 69					
FAD	登り鯉口水落す茶屋の梅	柳風					
T	加茂川の水に晒さる花式人	全					
EAB	庭先に客の手を引黒牡丹	全					
IAH	我れ増に生ケし夜店の花の数	全					
PAD	秋の田の出穂も涼しき稲田姫	全ウ					
UAD	蓮華座の鏡に移る胸の鬼	流巴					
GAB	茶汲とて濡れし衣を月に干し	全					
S	名は灰にいけよ秘密の落シ文 <small>ミ</small>	全					
AAD	恋病を治する硯の水せんじ	全					
RAD	鼻息もせぬ聖天の舞神楽	全 70					
BAD	二人列立て箱根の富士の嶽	含風					
IAH	八宗の根は一本の釈迦ヶ嶽	全					
GAB	日雲ある肌剛場の鏡石	全					
MAB	達磨目の腐るゝまでハ座禪石	全					
PAD	名所を廻る月日の須磨明石	全ウ					
	打欠ひて	71					
N	便毒と云ふ下疳鼻	飛羽					
N	火爪に掛し石の橋	全					
PAD	曇る月夜の弓を張	全					
EAB	穢多につまつく歯付下駄	全ウ					
N	飛込む水の子抜鳥	含風					
X	落齒に洩るゝなま椿	全					
RAD	角も片輪の牛車	全					
BAD	梅の領地の咲別れ	全					
RAD	如意の音する那須の原	全					
IAH	地獄に落す鬼瓦	全 72					
GAB	貝付煙 <small>イ</small> 肥前焼 <small>キ</small>	柳風					
PAD	三日月成の手水鉢	全					
Y	大恥居る鼻車	全					
RAD	勘略餅の疵鏡	全					
W	鉄炮同士が不和に成	全ウ					
OAD	酒を吐出す割れ徳利	流巴					
IAH	片輪と成し捨車	全					
GAB	小路の直る竈割	全					
AAD	野分に飛し鬼の面	全					
AAD	三日月形の根来椀	全 73					
RAD	後悔を吞む小盃	飛羽					
RAD	片われ出る子持月	全					
AAD	広嶋口の古薬罐	全					
Y	二子を分地の一屋敷	全					

PAD	姥か手を是非に叩や綱か門	全	RAD	濡羽織天窓かふせに鳥帷子親	全
GAB	潤明も一本結の花貫 <small>花貫</small>	全	C'	とけ兼る辻宗論名のミ僧	全 62
KAD	混濡に渡る嶋田の川支へ	全 60	GAB	降かゝる雨の使に雪の客	柳風
S	短冊にうつる色香の花色紙	柳風	AAD	取に来る日限忘れし刀研	全
Y	朝日ます娘ハ二見留主の月	全	RAD	竹馬來て曲輪に引る、地獄谷	全
FAD	免されぬ寺に宿かる女郎花	全	CAB	初旅の出舟に晴れぬ川支	全
CAB	吉野山千両出ねハ人の桜	全	Z	嫁人を春まで延る師走紺屋	全ウ
X	責らるゝ身ハ景清の琴の爪	全ウ	FAB	責られてなくくも舞ふ鶴か岡	流巴
W	赤面に及出丸の破布奉行	楽山	IAH	挨拶も出来ぬ紺屋の雨模様	全
MAB	助太刀の疵や断るつかれ武者	全	MAB	雨の夜に濡ぬ天窓の笠置責	全
KAD	曲輪の文曇る俄の月障	全	FAD	難題の歌に血を吐く郭公	全
IAH	約束の逢ふ瀬も隅田の川支	全	RAD	帆を揚て鬼の責来る年の灘	全 63
PAD	泣明す伯母が叩し綱か門	全 61	AAD	山の如く持し借錢の矢の使	含風
KAD	責口を立る妻戸に濡羽織	飛羽	GAB	相惚の中を立切る襖越し	全
UAD	注文の声に一羽もなき千鳥	全	EAB	玉章を延る日もなし年の暮	全
V	酒狂ひ醒て責立妻戸口	全	N	傾城か手折る柳の筆の花	全
RAD	友鳥関所なき出す羽黒山	全	S	揚弓の当りハ見えぬ暮の的	全ウ
OAD	借分の責に妻戸の開かね	全ウ			64
GAB	引かゝす牛ハ咽干瀧の水	全		見て置かよしく	ウ
T	借錢の山をきり取おの使	全	GAB	登山に咲やこの智の花色紙	飛羽
Q	駿台の柱に繁く三莖	全	CAB	流れ行世を引舟の釣翁	全
			KAD	草刈も実と成る物を花瓢	全
			EAB	畠打の人の指差す田子の浦	全
			N	宮仕ふ鹿の死骸や巖嶋	含風
			C'	仏書も根ハ一宗の釈迦ヶ嶽	全ウ
			IAH	竹生嶋ふしの付まで謡ひ本	全
			RAD	馬飼ぬ宿や軒端の花木槿	全
			RAD	麟の子の妻乞ふまでハ五冊本	全
			FAD	良辰を選ふ伊勢路の初曆	飛羽
			PAD	晴し富士を居ながら詠ム旅日記	全 66
			FAB	浦寺の疵ハ数へぬ玉の珠数	全
			JAB	深笠ハものうき時の隠れ因	全
			FAD	幾度も落字の念や花の秘書	全
			FAD	訳のある文ハ他人の目に掛す	流巴
			OAD	鼻油引油屋の膝栗毛	全ウ
			KAD	聞なれし声や籠拔の藪住居	全
			BAD	古市て座を張出す屏風店	全
			MAB	此石て生爪起す忍び妻	全
			JAB	客來に焼キちらしたる風呂の跡	柳風
			C'	車座に廻る下戸の大盞 <small>大盞</small>	全 65
			AAD	彦山ハ実には羽黒の友鳥	全
			CAB	黒白の世を口なしの花の色	全

PAD	鳥鳴までも蚊屋の外	全	AAD	雪の宿読れぬ経の行脚僧	飛羽	JAB	三葵二葉は捨ん市正	全
EAB	今宵初音を郭公	楽山		此返答に困り入り	ウ	X	生葉の肝に引かれて矢の使 <small>ヒツイ</small>	含風
FAD	連枝登城の供合羽	全ウ			57	Q	責立る妻ハ閻魔の髪 <small>の</small> 散り	全ウ
FAD	逢夜一間の月の眉	全				UAD	隠謀も狩に洩れ来る鹿ヶ谷	全
GAB	寐もせで暁ヶの朝 <small>白</small> 見	全	丑閏	五月鳥	ウ	AAD	ふみ渡る舟路幾夜も川支へ	全
RAD	虚言撞 <small>ツ</small> 鐘の床の番	全				S	袖の雛妾焼すりの緋の衣	全
FAD	照射の鹿を暮の鐘	流巴	即評如印		卯風 <small>(印)</small>	X	去り縁を仲人一条の戻り橋	飛羽
UAD	婦朝と聞し留主の耳	全54				S	肝膽を砕く夢間の金子支へ	全59
N	契るも久し花茄子 <small>ヒ</small>	全	S	来ぬものかハと歌侍従	全56	GAB	涅槃繪の表具和尚に責らるゝ	全
PAD	首七尋の遅桜	全	PAD	春を蛙の冬籠り	全	MAB	請合し日限り切れし刀鍛冶	全
S	早魃 <small>ハ</small> に成る他所の雨	全	KAD	雁の羽音や蘇武か妻	全	IAH	めぐり逢ふ共夜に曇る月障	全
UAD	先乗見 <small>ス</small> し馬入川	含風	FAD	粧 <small>ツ</small> ふ曲 <small>マカ</small> 憐 <small>カ</small> の夕鳥	全	PAD	赤面や読ぬ矢文に恥をかき	流巴
OAD	ふけ行閨の朧月	全ウ	BAD	足引 <small>カ</small> の山啼鳥 <small>カ</small>	飛羽	Q	茶摘娘の初音に負し時鳥	全ウ
IAH	また来ぬ人を藻塩草	全	BAD	月の出汐の舟問屋	全ウ	Y	頼 <small>ム</small> 子に小僧呼るゝ隠居寺	全
PAD	廿六夜の明の月	全	EAB	鹿に逢ふ夜の仁田の棚	全	V	死出の川友に流るゝ池の鯉	全
PAD	満汐と成る月の白	全	CAB	寺の木陰に夜の仁王	全	FAD	醉覚て枕のわるゝ身請金	全
FAD	八日も久し菊の酒	飛羽	X	すき間を見せぬ鏡磨	全	GAB	留主守に母衣の乱るゝ鶯の床	柳風
KAD	逢ふ一ト言の髪結 <small>ヒ</small>	全53	MAB	矢文に当る暮の的	含風	N	大倉か畳 <small>ミ</small> し夏の芭蕉蚊屋	含風58
AAD	留主の間伏の枕鐘	全	Z	門を開て琴の馳走	全55	CAB	蕎麦茶屋と聞ハ高音の須磨千鳥	全
X	雨乞 <small>ヒ</small> 後從濡支度	全	V	天の川原に向舟	全	EAB	質に出す家を責来る年の暮	全
FAD	物うしと聞く機の音	全	GAB	窓を明石の須磨の月	全	OAD	疵口を妻か吐出す二日酔	全

RA D	鎌倉に富士の山築く鯉骨	全	A' A D	旗昇味方大勢武者人形	全	A' A D	鰯口を祭る工面の鉢叩き	全 44
I A H	乞喰も物足る秋や盆二夜	全 40	I A H	浦役の権威や光る月日貝	全 42	B' A D	粟稗に空や行脚の腹太る	飛羽
B' A D	紫と色染上ヶし文ミの塚	含風	B' A D	貧僧の徳を綴ひの布施衣	風蛙	R A D	米くるゝ人を今年の秋の風	全
C A B	頭陀の底日にく重し傀儡師	全	P A D	佗鉢の執行て開く金銀花	全	A' A D	定食ハ粟を召るゝ仏太子	全
A' A D	短冊の色香の舍利や梅の宮	全	F A D	芸能の手も瞿子の花開き	全	P A D	きのへ子や牛て引かする阿弥陀堂	全
P A D	皇城に桃尻居へし京人形	全	B' A D	藤森に祭る粽の初昇	全	B' A D	念仏にまつしくもなし行脚僧	全ウ
J A B	細道に身は野晒しの香と華	全ウ	J A B	父母の菩提の為や布施の行	全ウ	F A D	頭陀の米満れハ欠ヶぬ月見寺	含風
P A D	塞銭の山は延立東福寺	楽山	M A B	茅壁に五器の備や非人講	飛羽	C A B	溜る程寒念仏の執行金	全
A' A D	乞喰も栄花に伊勢の梅の春	全	F A D	鍋公家もたよれ大樹の蔭かさす	全	X	鼻肩のある相撲にそ花の寄ッ溜	全
B' A D	飾り棚落る平家の武者人形	全	U A D	欲のつく姥草餅のねまるなり	全	O A D	乞喰も力付ヶけり姥か餅	全
O A D	米蔵を立テ地の銭の親鸞忌	全	P A D	廻国も済て築地の供養塚	全	U A D	山のめく溜て身請の祇園町	全 45
J A B	青銅て買ふ何疋か馬と鞍	全 41	I A H	執権ハ九代鯉の腹太し	全 43	R A D	藪医まで千草手向る神農忌	流巴
F A D	天皇の御宇か内裏の雛人形	飛羽	E A B	王母か桃を飽まで東方朔	楽山	P A D	御加増に我か宿せはし米俵	全
O A D	植木屋は今三千の花やしき	全	O A D	進物でよをさえ渡す吉良の月	全	F A D	乞喰の米の重さや加賀の秋	全
O A D	騎馬武者ハ五月にかされ初轡	全	P A D	年の戸を明て孫見る鏡餅	全	F A D	桃の間に飾る内裏の雛の襟	全
P A D	蜜蜂の花に念仏供養塚	全	A' A D	吉良もよし抓む錦の五ッ爪	全	U A D	金銭の山も築地の上人忌	全ウ
U A D	乞喰も腹一盃の秋の月	全ウ	B' A D	酒香蓬萊山の賀の祝	全ウ	A' A D	行脚僧や胸に重荷の頭陀袋	楽山
B' A D	九重に飭る上巳の京人魚	流巴	R A D	勸化分繋く鞍馬の寺普請	流巴	J A B	孫や子の歯堅祝ふ寿老神	全
	矢張り人形の方よろし		A' A D	勸進に太トしく立し宮柱	全	B' A D	経堂に門弾き諷ふ琵琶法師	全
U A D	高麗の餅を飽まで猿廻し	全	K A D	店飾る熨斗の紋日の雛の襟	全	A' A D	勝声を揚る手華の相撲芝居	全
U A D	餓鬼の腹一盃満る盆の月	全	O A D	乞食の腹鞆打秋祭り	全	A' A D	隅田もなし日に千金の渡し守	全 46

JAB	水無月汗かく駕籠の荷 <small>ヒ</small> 坂	全	I AH	龍眼も落る泪の隠岐 <small>ヒ</small> の供御	全	RAD	我が蛇から吞れし酒の二日酔	全ウ
S	糞なめて味の開くる石の箱	全	GAB	若君の陳立席に居ねむり	全ウ	V	荒法師高ねもミ出す珠子の音	飛羽
KAD	苦ニ開 <small>ク</small> 華の匂ひの曲輪の梅	全ウ	JAB	落されて娑婆の地獄や鬼界嶋	含風	Q	須磨の茶屋打たて立たれぬ蕎麦煙	全
I AH	日輪の光りを埋む水の底	飛羽	AAD	山の神崇る脾虚の定薬	全	W	姥板身ハかるかやの雨の宿	全
N	関越る山を産やの奥の旅	全	GAB	引汐に向ひし所帯の船問屋	全	OAD	兵糧攻小城ハやせ地の骨と皮	全
KAD	日ハ隠れ片われ月の夜や泪	全	UAD	天罪 <small>ヒ</small> や慈非になき出 <small>ス</small> 地籠の雉子	全	S	原中やふ <small>ミ</small> まよ <small>ヒ</small> 路をなく <small>ヒ</small> 鳴雲雀	全38
S	紅学ハ坂に車を押上り	全	AAD	駕籠舁の兒に火焰の石不働 <small>ヒ</small>	全36		實 <small>ヒ</small> 集てく	ウ
S	火立顔拈 <small>ヒ</small> ふつめくよめ菜草	全34	OAD	譏奏の逆槽は悪 <small>ヒ</small> し蝦夷渡海	流巴			
OAD	生なから乗る清盛か火の車	楽山	PAD	病後には飛火の旅の目の蛭	全	S	川丈の文 <small>ミ</small> ハ流さぬ小町塚	
FAD	落武者の君に静か生別れ	全	KAD	質の兒の哀や積る城の雪	全	JAB	蒔 <small>キ</small> 錢を網にかけたる伊勢の橋	柳風
AAD	足摺て鳴や鬼界の浜千鳥	全	FAD	野華売れぬ日は早魃の声も枯れ	全	BAD	寿を祝ふ歳暮の炭俵	
RAD	牛若に引れぬ妾の捨車	全	OAD	悪逆の果相国の火の車	全ウ	AAD	仏縁に諸国しミ付阿弥陀堂	飛羽
PAD	積悪は其身を責る娑婆地獄	全ウ	Q	絵師の面ら悪 <small>ヒ</small> 秋の浮住 <small>ヒ</small>	楽山	JAB	困窮の身も寿な賀の祝 <small>ヒ</small>	含風39
OAD	濡続く袖に涙の流れの身	流巴	JAB	継母か無実責打餓鬼の杖	全	GAB	焼討の跡に所帯の立襖	風蛙
FAD	水計り寝せて苦界に浮 <small>キ</small> 沈 <small>ミ</small>	全	S	君をのミ撫し子殺す武狩	全	MAB	献立に餘る土産の見立客	全
KAD	雨乞し面さしはなし蓑と笠	全	T	君のがし愛子身代捨小舟	全37	BAD	初旅の荷も銭別も牛皮籠	全
AAD	叩かれし団扇に班女骨か折れ	全35	FAD	孝に売る我か身ハ仇の他人里	含風	AAD	乞喰の首に掛たる頭陀袋	全
JAB	よりか <small>ク</small> る縄てしめ緒の国丸け	飛羽	UAD	蚕飼ハ腰の骨折桑の杖	全	PAD	敷嶋の道を伝 <small>ヒ</small> に歌鏡	全ウ
S	笠寺もかくていそかむ雨の旅	全	BAD	吉野山ちりて落降る雪の旅	全	BAD	植置ケハ四節賑ふ山やしき	柳風
N	請られし身ハ梶原か二度かけ	全	AAD	すべらるゝ娘のきせるや青煙草	全	UAD	布施の米積 <small>ミ</small> し俵の高台寺	全
			PAD	都から馬程肩に大原女	全			

FAD 御幸に葦の引掃除

飛羽

丑三月鳥

FAD 海老煮るまでの三日の月

全

巻頭流巴雅丈

ウ

GAB 生鯉市の二日売り

全

難儀と云ふは此様な事

ウ

RAD 娑婆の重身の落支度

含風ウ

せき虫ハ葉師地蔵を伏シ拜ミ

飛羽

了簡の破れて蚊屋の外ト住居

全ウ

W 四方に手配紙屋町

柳風

筆風も片書駕籠や箱根山

柳風

梅の花寒さこらへし雪の春

全

EAB 踏かへて行奈良草り

全

行暮て宿る木蔭の雪霰

全

游かれぬせつなき娑婆の牢の鯉

全

KAD 出勒渥の長居客

龜尾

背ハ輕し胸に重荷の御抱守

飛羽

追付はいわねと野路の放牛

飛羽

CAB 干らぬ紺屋の雨模合

全

積む雪に馴れ薄着の旅衣

含風

鬼の攻娑婆に世話や火の地獄

全

KAD 卷帆に文は走り筆

全

泣々も子にわかれ立上意風

風蛙

只一ツ引かぬ白歯の欠残り

全ウ

KAD 即評如印

全

福原の悪も燈出す火の車

全

股腫して外科に王母か向駕籠

流巴

卍 弥生鳥

ウ

賞ひ乳て生立る祖母歎孫子煩悩

全

喰当し病ミ齒からめく海苔の砂

全

一 五百三拾点

流巴

わかれ立名残の波の喜界嶋

全ウ

一 五百式拾点

全

景清の仇の横矢の身に当り

柳風

稲妻の光る嫉妬の妾の床

全

一 全

風雛

壹ッ瘡海出母ハ船に酔

全

兵粮絶餓鬼籠城の骨と皮

全

一 全

含風

せき虫ハ藪医も首をひねり針

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

風蛙

一 全

含風

仇の身の火の責に逢ふ地獄灘

全

骨肉の親に上意の太刀嵐

全

一 全

含風

小三太は大盃の二日酔

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

風蛙

一 全

含風

小三太は大盃の二日酔

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

風蛙

一 全

含風

小三太は大盃の二日酔

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

風蛙

一 全

含風

小三太は大盃の二日酔

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

風蛙

一 全

含風

小三太は大盃の二日酔

全

行暮て知らぬ闇地の旅の空

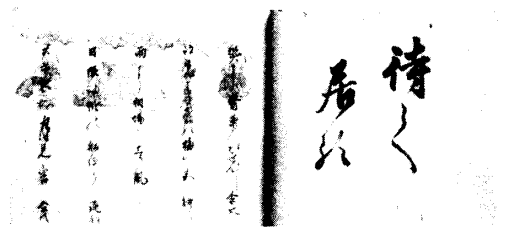
風蛙

A'D	酒樽走る俄客	全	EAB	人梅も晴れ着の桔梗染	全22	RAD	雨に白露の抱牡丹	含風
JAB	赤穂に走る駒の足	全20	MAB	夜鷹の蕎麦の迎喰ひ	飛羽	IAB	時を移さず鐘供養	全
S	腰掛けて吞茶椀酒	風蛙	KAD	日限汐干の船卸	全	UAD	坂に車の牛仕ひ	全
B'AD	出舟に頼ム土産苞	全	RAD	息を切身の鯉売り	全	OAD	立なから喰酢屋の飯	全
W	片尻掛し嶋原の橋	全	GAB	雨に散らせぬ桜守り	全	V	雨乞触るゝ道走り	全ウ
N	雉子に蒔餌の朝寝面	全	PAD	袖を濡らさぬ雨の花	全ウ	Q	飛鶴に母衣を掛	飛羽
A'D	出水に裾の步渡り	全ウ	KAD	夜を織明す師走機	風雛	KAD	啼くも飛郭公	全
EAB	柳乗出湊舟	楽山	KAD	早苗取る娘の束ね髪	全	EAB	夜打に鳴た陳太靴	全
CAB	旅立朝の妻戸口	全	FAD	恋の皐月の廻し床	全	S	笠鳴と聞夜の雨	全
EAB	立なから吞茶屋の酒	全	EAB	師走紺屋の時花染	全	W	落人入れよ穴かしこ	全25
KAD	行逢ふ舟に一言葉	全	EAB	人の散り込む桜の茶屋	全23	GAB	出舟関立早使	柳風
A'D	挨拶出ぬ放れ牛	全21	A'D	矢矧川原の柵構へ	流巴	Y	一口蛸を釣へ責	全
GAB	客に柴火の火吹竹	含風	UAD	狛師出立の鹿子飛	全	A'D	寺に降込雪見客	全
IAB	出船に走る筆の海	全	KAD	雨に笠置の落椿	全	MAB	砂場に走る胡麻の蕎麦	全
FAD	月見入江の矢の使	全	OAD	出舟に文ミの蚯蚓書キ	全	V	相場の角力に走り舟	全ウ
A'D	箱根二人の早飛脚	全	RAD	熱より時花る医師の駕籠	全ウ	B'AD	わらちも解ぬ雪の使者	滴水
Y	落る嘶の橋渡り	全ウ	GAB	放れ馬追ふ木槿山	楽山	Y	方計師か吉原を差逃し	全
FAD	舟の垢汲む湊風呂	一睡	OAD	伊吹山昇医師の駕籠	全	Y	馬士は煙草を五駄ぎり	全
A'AD	身請の獅子の船仕舞	全	IAB	車は跡に放れ牛	全	X	俄船橋御意渡り	全
CAB	三輪の小杉の日照紙	全	OAD	医師に向ひの伊吹山	全	IAB	一ト口蛸の寺飛脚	全26
RAD	四座敷猿の廻し床	全	MAB	猪の宍武者の走り舟	全24	PAD	茶一ッて立ッ時花医師	風雛

S	俣の角しりも病む根のいの毛すり	全					
UAD	怒る鬼和歌の力者に角か落	全					
KAD	横逆の酒池に九尾の只よ花	全ウ					
IAH	付鬢も夜の椿や朝戻り	風雛					
OAD	作医の化ヶの皮剥く稲荷町	全					
FAD	慰ミの烽火に開く花芙蓉	全					
KAD	箱人の芸の蓋明く鎧初	全					
RAD	嫁入りの晒落や惟然か裸舞ひ	全14					
RAD	拍子抜ヶに踊るや腰の弱法師	流巴					
OAD	鼻声の経は人魚の恥チ叩キ	全					
UAD	傾ひて謠ふ小鍛治のなまり声	全					
IAH	塵り付ぬ風情は憎し負の血カ	全					
AB	鞍馬山貞向キ天狗の鼻競べ	全ウ					
X	腹巻や毛引威の貝競	楽山					
EAB	餓鬼の瀬て鯛釣揚蛭子貝	全					
N	打すます腹立直る蕎麦の仇	全					
C'	貝競風呂に入江の湊口	全					
L	餓鬼道を遁れたりヶり阿弥陀堂	全15					
IAH	懐の抱子擽る留主の月	含風					
MA B	五右衛門か裸踊の風呂游キ	全					
AAD	田の神の扇子飛ばす舞神楽	全					
KAD	傾ヶて行組笠の初歯黒	全					
UAD	夜着の皮剥れて穢多か馬子の真似	全ウ					
IAH	戯れの昔を語る時鳥	飛羽					
BAD	噂程濡来る客の俄雨	全					
KAD	十六夜の月も鏡の初歯黒	全					
OAD	這廻る子を釣親の恵美須鯛	全					
EAB	客の狂に謠ふ乱座の亭主振り	全16					
OAD	廻さるゝ茶臼女の猿噺	柳風					
MA B	三番叟を蹈山道の羅漢舞	全					
GAB	下手口で座の浄るりに目を覚	全					
S	釣られたる鯉の尾バちて鉢叩	全					
PAD	苞弁当開花見に曲踊	全ウ					
UAD	逆剝に穢多かおふたる相袂	滴水					
FAD	邯鄲の脇は夢かと思そこなひ	全					
RAD	梟の眠る仮名目をさし損し	全					
RAD	泣き狂ふ酒座に片腹擽られ	全					
Q	寝不動も這ふ子が呼んの目に見惚れ	全17					
IAH	語らせて擽るや妾の因訛り	風雛					
AB	合歡木の花も西施の盛り貝	飛羽					
X	口早に擽る手よりの悪後達	全					
EAB	酒の座に肌か踊の拍子抜ヶ	全					
UAD	尾振りて客の玉取る妾か猫	含風ウ					
CAB	浮足て擽る白歯跡を見る	柳風					
Z	鞠打遊ッ穢多か女尻を剥キ	全					
Z	鞠リ遊ッ娘ニ飛はする裾剝かれ	亀尾					
EAB	ふたり客地走に出たる五冊本	全					
N	晴れ富士か裾に出たるもゝの貝	全18					
JAB	雨降掛る虹の橋						
N	四里かけるふの五六寸						
EAB	宿引客の早飛脚						
Z	丁数灯ぬ夏夜の月						
EAB	いかり揚たる船便り						
JAB	宇治川陳の一騎駈	流巴					
PAD	桜見の友の走り舟	全					
GAB	仇の跡追ふ兎さくら	全					
IAH	飛火の客に濡松葉	全					
RAD	初音を負ぬ鯉売り	全ウ					
Y	片尻掛て宵の約	柳風					
X	出船勘定の塩升り	全					
KAD	家内関立地藏講	全					

寝ても起ても忘れさりけり

CA B	去る縁の糸筋を引春の風	清書堂	EA B	独り子の病と捨行旅の宿	全ウ	FA D	忠孝の二字腸夕に置 <small>ミ</small> 本	風雛
EA B	十年迄打病む念 <small>ネ</small> の暮の敵	全	RA D	釈迦 <small>ケ</small> 嶽登る木魚の定念仏	樂山	UA D	打れたる扇か骨に折れ込り	全
FA D	産 <small>ミ</small> し子の座遷に浮 <small>ケ</small> ふ由井か浜	全	S	大石に降積む仇や雪草鞋	全	FA D	象龍の袖に玉なす嵯峨の琴	全
EA D	龍眼の隠岐に浮身の座遷船	全	L	富士浅間消ぬ煙の恋の山	全	IA H	遺言の波受 <small>ウ</small> 深き湊川	全
EA B	逢ふた夜の移る香ひの袖枕	全1	T	一筋に懇 <small>フ</small> 仇夫の鼻齧	全	IA H	大望を包む赤穂の塩俵 <small>ラ</small>	全5
IA H	子を先に立てし衾や暮の鐘	流巴	UA D	子の旅に老母か世話を焼豆腐	全3	KA D	置去りの工夫に氷る夜半の鐘	流巴
KA D	去られ妻は名残の浪に浮沈 <small>ミ</small>	全	V	切れ風 <small>ニ</small> 子守も共に厭 <small>ミ</small> 泣き	含風	KA D	自在なる身にも寒苦の梅の花	全
EA B	童子教習ふ字指の物覚へ	全	W	勺 <small>ニ</small> 氷し夜るは矢立の筆枕	全	IA H	説法は後世のさはりそ茶筌髪	全
EA B	献覽も明日に限りし狂言師	全	UA D	読習ふ経は見台に明鳥	全	RA D	托鉢の悟り開かん仏想花	全
L	呑込ぬことのしらへに明の鐘	全ウ	L	仇雨を洩さぬ巴の瓦葺キ	全	OA D	蝦夷の運祈る静は珠数を揉 <small>ミ</small>	全ウ
MA B	部屋の酒呑し昨日の二日酔	柳風	KA D	切戸から無き名の立し留主の妻	全ウ	Y	西風を仰く浄土の寿老神	樂山
N	死出の旅枕の乏し蚊屋の内	全	JA B	去られたる跡は誰か添 <small>フ</small> 懐子	一睡 <small>カ</small>	IA H	摺小木を杖に修行の釈迦か嶽	全
OA B	加茂川の水に濡れ入旅からす	全	UA D	師の恩を茶毗の煙りに泣かふり	全	IA D	九年程あた矢を悔 <small>ム</small> 弓枕	全
PA B	別れしも又逢ふ事の青葉山	全	PA D	賤か女は虫より蝦夷の秋を泣キ	全	Z	逆櫓の波にうら <small>ミ</small> のか <small>ハ</small> り舟	全
Q	付帯を結び置ける旅草鞋	全2	L	厚恩を泣 <small>ケ</small> と届かぬ施餓鬼棚	全	X	血の涙足摺流す捨小舟	全6
QA B	遺言の仰も高き家の巻	風蛙	DP	岩橋の其ノ黒髪か目に懸り	全4	L	摺墨の干ぬ筆髪の花色紙	含風
JA B	解るまで祈る願望の父の仇	全	RA D	常盤木の源氏の舍利を根に含	飛羽	BA D	佗鉢は開け一度は梅屋敷	全
IA H	長旅に居ながら母の旅疲れ	全	GA B	舞ひの間の羽のしつかなる鶴か岡	全	EA B	諷ふしの幾重付迄竹生嶋	全
GA B	五月雨や枕淋しく蚬ノ内	全	X	初 <small>ハ</small> 淀 <small>マ</small> に味逢ふ曲輪の塩かけん	全	MA B	朝夕にひらめく妾か焼 <small>ケ</small> 火熨斗	全
			IA H	亡跡の妾か鏡のうらの梅	全	MA B	流れ子は浮世に沈む由井か浜	全ウ
			L	梅か香に念の一字か雲晴す	全ウ	KA D	捨られし山は雪路の白拍子	飛羽



凡例

前掲雑俳書に同じ。

点印については次の通り。記号は前の例に同じく句の上に付ける。

原稿清書について本学国文科生野付友子・大坪智子さんの助力を得た。あつくお礼申しあげます。

K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A
U	T	S	R	Q	P	O	N	M	L	
E'	D'	C'	B'	A'	Z	Y	X	W	V	
O'	N'	M'	L'	K'	J'	I'	H'	G'	F'	
X'	W'	V'	U'	T'	S'	R'	Q'	P'		

れるが、句作者や点印が他と異るところから別の運座のものであろう。

さて卵風という人物を中心に、流巴・柳風・風蛙・楽山・含風・一睡(カフ)・飛羽・風雛(串良)・滴水・竜尾らの連中で行われている。これらの人物二・三については、前掲『入来町史』上に、固心院墓地らの墓碑に刻まれた俳名によって入来院の人物であることが明らかにされている。しかしすでに墓碑などは現在整理されていて見ることはできないという。ここではそれを調査された本田親虎氏がノートの借覧を許されたので、『町史』とともにまとめて、次に参照・紹介させていただくことにしたい。

飛羽——本名種田恵十郎・蒙猿で墓碑に「俳名飛羽」と刻す。文化十四年(明治八年(一八一七)七五)前の種田家当主。男子がなく、後種田家の彦右衛門を養子とした。彦右衛門の娘がイク。恵十郎は領主の側役をつとめた。明治元年には寺子屋の師匠をし

た。

含風——本名種田伝次。墓碑に「俳名含風」

と刻す。文政十一年(明治二十四年(一八二八)九一)。後種田家に生れ、下門口種田家を継ぐ。明治初年入来郷戸長を勤めた。

楽山——本名木尾唯七。文化十五年(明治二

十七年(一八一八)九四)。木尾善十郎(第一代入来村長)の父。領主の側役として仕えた。示現流の打手で書道も巧者。安政年間には横目の役を勤めた。

流巴——『鳶の門』には卵風から流巴宛に批

点の結果が寄せられている。本書が古河家に伝ったことについては前述の通りである。古河家とすれば、年代的に古河四郎右衛門恕手であろうかと本田氏は推定されている。天保四年(明治? (一八三三)?)。

元治二年二月から郡見廻を勤め、明治三年六月には地頭土持佐平太から

改めて三ヶ年同職を勤めるように仰せつけられた。孫が古河直栄氏。

入来郷の主たる人々と考えてよいであろう。『鳶の門』はまさに明治を迎えようとする頃に成ったものである。中央から遥かに離れているとはいえ、維新への波は入来郷にも寄せ来たっていた筈である。この余裕は入来院領主の文学奨励の一つの実りといえようか。入来という地域の一つの「生活と文化」を認めることはできそうである。

東郷家に伝存する雑俳書の内容も同様の資料といえよう。

赤ひ坊主になひく常盤木

五百十五点二百二十五
百八十 一はん 卯はん

(慶応元年) 丑 閏五月

A E 火鼠走る広原海

全 12

6 待て居る

A E 鷹ハ戻るに憂曲輪

全

7 此返答に困り入りけり

A E 鳥ハ杉の柄頭

一雲ウ

8 見て置かよしく
9 打欠ひて (慶応元年) 丑 陽月

A E 餅に夜打の鼠ミ切り

全

10 鳥渡した事か楽々になる※表紙「元治二

A E 借シ見ハ御日の塩かげん

鬼三 13

11 残念く是は残念 年 丑 正月

A E 春の着抜の散桜

十方

12 押し分けて (元治二年) 丑 如月

A L 雛ハ母と同じ年

卯門ウ

※元治二年丑初春日

M 赤錆抜ケてひつつるき

全

13 (句合せ残念)

A E 駕さへ二人流レの身

全 14

右のような構成で一書として綴じられ、表

F A 南京響く爪はしき

全

紙が付けられている。しかし、それぞれに記

A E 顔ハ夜見せのなかしはご

美山ウ

された日付をみると次のように順序を整えて

A B 口で目をひく辻芝居

全

おく必要がある。すなわち、元治二年は「乙

A O 咄の光る箒屋

全 15

丑」の年で、四月七日をもって慶応に改元さ

A Y 鳩の命を切り火縄

全

れているので、年号は()内に記したように

K むかしを磨く開帳場

未暁ウ

なる。したがって

A Z 御庭を一寸と望む客

全

10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ・ 13

A W 夜るを勤の雛店

梅二 16

の順に整理してみることが出来る。13は書体

甲乙如何

※丑三月

印東白堂

梅見月上旬

氏平 馬 来ウ

5 貫ひ集てく

は同じであるからやはり同じ頃のものと思わ

著の発句作法指導書『発句指南』がある。

凡例

本文は、原文を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため左の要領に従った。

(1) 文字はおおむね現行通用のものに改めた。しかしわずかながら、異体字・略字体を用いたものもある。

(2) 清濁・仮名遣いは原本通りである。

(3) 判読困難な箇所は□としておいた。

(4) あきらかに誤りと思われる部分には(マ)と脇に付した。

(5) 読解の便をはかって、一部ゴチック体を使用した部分がある。

(6) 丁付は(1)・(ウ)のように簡略にした。

(7) 印点については、右記のように模写図を作り、ABC…の記号で句の上に記した。ただし、印の色については表わすことができなかったことをおことわりしておく。

「題不明雑俳集」(題簽欠)

そんなしかなき折に幸ひ

FN 国なびかする扇の手

卯門

B 右左りゆたんのならぬ事になり

SQ R 湯揚りの耳に切戸の時鳥

卯門

CD 廻た魚に切るゝ糸口

V T 珍客の袖から鍋に落ちる雁

全7

AE 間伏を起す犬の立声

CU 俎板の干潟に遊ぶ鮮鯉

全

FG 人の股から店のいば図き

VW 居風呂に互の垢を摺落シ

一雲ウ

AE 脈を飛する雉子の朝雷

CH 鑓玉に乗て嬉しき富の札

八□

AE 新しき妻老いの嶋原

FN 隣から献立貰ふ初蕨

鬼三8

CH 千の矢先を払ふ鎌の手

AO 老若の花見戻りに迎馬

十方

FI 去た女房の跡の味噌桶

AS 母鳥の泪ハ雨と降る焼野

卯門ウ

AK 垣の袖から破れし蜂の巣

CX 忍ひ付国こがるゝ胸を火取虫

全

JV 三徳に手を廻すザルの場

YR 桶伏の穴より拝む納戸がね

全9

L 落つく床に野火の焼打

PQ R 捨る子を貰ふつき穂の玉椿

全

M 投る手品に消る雪打

AS 客に爪の足ぬ竈へ入ル雀

美山ウ

AE 月もる寝やに風の横入

VZ 大客に餘所から手紙落ル雁

全

K 間夫の節季よ夜着の桶ふせ

M 古ル手の算用戻る銭車

全10

AE 梅松しげるハツ玉の揚弓

FN 御咄も暮て沢一罷出

全

FN 業ひらめいて渡ル板橋カ

AE 明て来る歳暮の品の両方聞

未曉ウ

AE 朝鮮入に医者の評定

AE 尺の袖とめしに遊ぶ柴肴

全

AO 沼田の裾を逃る畔道

AE 解キくれよ親のメ置ク帯の口

梅二11

AP かたきに帯をびる夕立

AE 解キくれよ親のメ置ク帯の口

梅二6

御覽せよ

定勝は島津継豊の四男で、元文三年（一七三八）から明和六年（一七六九）の間、入来院二十四代領主として学芸・文学に親しんだ人物である。詳細は『町史』にゆづり、ここでは書誌的面での解説にとどめておきたい。

題簽は欠。サイズは大本（たて二四・四×よこ一六・五センチ）、写本一冊。墨付十七丁。十七丁目は裏表紙に貼付されている。表紙は黒・朱・青の三色刷で菊花に菱の模様のあざやかなものである。おそらくは風雅に遊ぶ領主の手製ではないかと想像される。

内容は「右左りゆたんのならぬ事になり」に対して十八句が付けられ、「そんなしかなかき折に幸ひ」に対して十八句、「御覽せよ」に対して十八句がそれぞれ前句付されている。卯門、一雲、鬼三、十方、美山、未暁、梅二、八〇といったメンバーで、長点、印点が付されている。ことに印点は朱・青色を用いて図表のような近江八景や源氏巻名にちなんだ華麗なデザインが用いられていて、これを競い、楽しんだ様子が察せられる。定勝には他に自



雑俳集翻刻

前述したように、今回は特に南九州に伝存する雑俳集の紹介と翻刻を行いたい。薩藩においては近世後半期に各地で前句付が行われた形跡が認められる。ここに紹介するのはその一部である。

以下の雑俳集については、大内初夫（鹿児島大学）・福山武徳（枕崎高等学校）の両先生に執筆協力を得ました。また入来町に伝わる雑俳書を御紹介下さり閲覧の便をはかって下さった本田親虎先生に感謝申し上げます。

本田先生は『入来町史』上巻にすでにここに述べる雑俳資料について考察をしておられ、今回も種々の御教示を賜り、またノートの借覧をお許し下さいました。また、雑俳書の紹介・翻刻について御所蔵の資料を快くお許し下さった長坂マツ・古河卓見・竹本鼎の各氏にあつくお礼申し上げます。

○題不明雑俳集

大本 写一冊（入来町 長坂マツ氏蔵）

本書は昭和三十九年十月刊行になる『入来

町史』上巻（二九〇頁～二九六頁）につとに

紹介された雑俳集で、入来院第二十四代領主定勝時代のものである。奥書に定勝自書にて

「甲乙如何／東白堂（丸印）平氏・（丸に角印）馬来／梅見月上旬」とあり、その後点数が記されている。成立年月は不明だが『入

来町史』の中で本田親虎氏は右の定勝の俳号署名筆跡と印鑑から、およそ宝暦頃のもので

はないかと推測されている。本田氏は『町史』上の中で「定勝は寛延元年（一七四八）実兄

に当る時の藩主宗信に随行して江戸へ出府し、翌年帰国しているが、十四才になったばかり

の少年には、当時の江戸俳壇の影響はまだなかったであろう。しかし同時に出府した岡元

正右衛門等の上級士たちは、江戸雑俳の流行が相当に影響したのではないかと考えられる。

上述の雑俳集が横目の家柄であるところの入来院庶流家長坂家に保存されていることによ

って、句作者達の多くは上級士であったと推測されるからである。」（上書二九二頁）と述

べられている。



○七日、佐敷を立。けふぞ晴ぬれとむねつき坂峠、夫々野立、また川も有り。貫太郎峠、難所、人々かろふじて水俣へ着ぬ。此所へ佐土原より牧野田氏・能勢氏、淡路守よりの使とて、このほどより待受けぬとて出迎ひ、恭くしばし語り合ひ更ぬれハふしぬ。

○八日、大雨。水俣を立行程に川く敷石の上を通り、急なること大難所にて、夜に入り大口へ着ぬれど」(三十・オ)少将の君御初より伊集院氏御使に而とハせ給ひ、品々恵給ひける有難さ、御使に逢ひ鹿府の御左右承り、安き思ひをなしぬ。けふハ人々へ酒など進め、打ふしぬ。

○九日、大口を立。雨にて山坂難所いふべくもあらず。人々も行先いかにと覚束なくためろふ斗にて、よふく栗野へ着ぬ。

○十日、栗野を立而、きのふに同じく難所多く、人々いかゝあらんと思ふに」(三十・ウ)

はけしきハ何にたとへんつゝら折の やままた山を雨に越つゝ、
けふもあやなく、小林へ宿りぬ。

○十一日、小林を立、野立、野尻へ休らひけるに岩瀬川満水にて渡りがたくとて此所へ宿りぬ。昼過より雨は晴れけれといふせき所にてむなく暮ぬ。

○十二日、岩瀬川あきぬとて野尻を立出ぬれど野立のミにて見所もなく、高岡へ宿りぬ。淡路守より用向も有り此所まで山田氏出迎」(三十一・オ)さまく物がたりけふも暮ぬ。

○十三日、高岡を立ち、兩度川渡し、夫より六ツ野へ休らひ、此所より

佐土原領にて、迎ひの人々多くつどひ行程に水落といふ所にしばし駕籠をとどめ、暑さをしのぎ休らひぬ。山く晴渡り、田畑の気色詠やり、所の名によせて

あつさをもしはしわすれて坂の名の 水落ときくにうるほひにけり
夫より佐土原へ着、淡路守初対面し、一門初にも逢ひ安堵の思ひをなし、興さまぐ」(三十一・ウ)にて、永き旅ねのうさもわすれつゝ物語に夜も更ぬれば、寝屋に入て打伏しぬる程もなく永き旅ねの夢ぞさめけり。

道中日記 終

」(三十二・オ)

降りくらし、からうじて小倉へ宿りぬ。

○廿七日、小倉を立ぬれど道悪しく、しはし黒崎へ休らひぬ。此所豊前筑前の境石の印あり。夫又野立はるかに田畑ミゆれどさのミ詠めもなく、木屋の瀬へ着ぬ。

○廿八日、木屋の瀬立出るに、けふは堤土手長く、川渡し、城主より御馳走船出で難なく渡り」(二十七・オ)直方へ休らひ、行まゝに此辺石炭焼所とて匂ひあしく、けふも見所なくて飯塚へ着ぬ。

○廿九日、飯塚を立けるにけふも野立、冷水峠、長き坂・難所のミにて山家へ宿りぬ。此所へ筑前の城主より御使者にてとぶらはせ給ひ、御国産の品贈り給る、有難き御かへりこと申のへ、夜も更ぬれハ打伏しぬ。

○五月朔日、山家を立出けれど、雨にて道はかどらず。されど宰府へまふて天満宮を伏し拜ミ」(二十七・ウ)

あふくてふ天満神の宮はしら 立そひて猶国まもりませ

夫より社内の茶屋へ休らひけるに、諸国よりのまふつる人も多く賑ふありさま、げに天満神の祈とくと打詠め、しばし爰にてうさも忘れ、人へも酒すゝめなどして立出る。行程に筑前後境の印あり。夫又野立さまくなれど道悪しく、夕つかた松崎へ着ぬ。

○二日、松崎を立行けるに、又神代川船渡し、夫又府中へ休らひければ、久留米の城主」(二十八・オ)母君の方より女房達御使にてとハせ給ふ恭さ、直に逢ぬれどしはしことバも出ず。さまく語りあひうさもわするゝばかり、またいひも尽ぬにまたいそぐとて名残おしくも立出けるに

別れては是ぞ限りと思ふにも さらに立うき旅の衣手

行く瀬高に着ぬ。

○三日、瀬高を立行程に、早苗時とて賑ふ賤か有さまはるくとみやりて」(二十八・ウ)

あら小田をミしハ昨日ふと思ふまに 遠く来にけり早苗とるまも
けふは難所もあれど田畑のけしきいふべくもあらず。詠めつゝ山鹿へ着ぬ。

○四日、山鹿を立けるに雨になり道はかどらず。されど清正公へ参り、道殊のふ難所なれど昼比より雨も小降りにて、行く賤が手わさのいとまなきを見て
植へ渡す千町の早苗はるくと 見るにも賤が恵をぞしる」

(二十九・オ)

又大雨降りになり、暮行まゝ詠めもなく籠もたれこめ、夜に入り川尻へ着ぬ。

○五日。川尻を立出けれど、船渡しいとゞさゝめきかろうじてむかひにつき、山・田畑・松原の景色も晴れなばと思ひつゝ行。家々に菖蒲葺けるを見て、
見るさへ古里いかに菖蒲草 かりふく軒は里をわかねど

雨降りつゝ見所もなく、日奈久へ着ぬ。

○六日、日奈久を立。はるく田畑もあれど」(二十九・ウ)赤松太郎・佐敷太郎とて大の難所の峠にて、よふく佐敷へ着ぬ。

に、川を見渡し気色もよろしく、額は榮翁君御筆にて清音亭と有り。其外詩歌連誹さまくのはりつけ屏風多く有て、餘程面白くしはし詠め、心有人にミせまほしく

心有人にミせはやすまくのことくさ尽す宿の住居を

○十六日、矢掛を立。けふもことなく神名邊へ着ぬ。

○十七日、神名邊を立出るに雨になり、峠山坂（二十四・オ）いと、道あしく、糸崎神主宿へしバし休らひ、むかひに八幡宮社有。神さひぬれと大社なり。されど雨にて参りもやらず此所にて伏し拜ミ行程に、はるかに塩屋見へけれと雨にて煙もわかず

見るにさへ哀もふかし塩かまの 煙は雨にしたむせひつ、
けふもことなく三原に着ぬ。

○十八日、三原を立。けふも舟渡し、峠のミにて見所なく西条へ宿りぬ。（二十四・ウ）

○十九日、西条を立。けふも瀬勢尾峠越しつゝ行く。船越の坂岩鼻より広島へやとりぬれハ、城主より御もてなし人多く出、いとねんごろなり。夜に入り雨降り出す。

○廿日。広島を立、草津へ休らひ、夫々直に船に乗り行程にめられぬ遠近の山くはるかに見へ、人くにとひぬれど雨にて見分かたく、やうく宮島へ着ぬ。雨もやミ、聞およひしもとふと大社にて、御内神御本社へ押し奉り、宮人のあないにて所々廻りぬれど、おびたゞしき（二十五・オ）神くにて、一日なぞに参り尽す人はなきと聞てせんかたな

く神主宿へしはし休らひて、また船に乗りて帰る程に此度ハ空晴れ、見さりし山くもよく見へ渡り、げにむかふ気色めつらしく狂を催しぬ。

古里の人にミせはや行船の はても浪路のあかぬ詠めを

人さくめく内に又空曇り、降りくる雨もわかなくさまくかたりあふうち船着ぬとて陸へ上りけれど、人しとゞにぬれて珠波へやとりぬ。（二十五・ウ）

○廿一日、珠波マツタツノ波を立ければけふは空晴渡り、行く関戸へ休らひ、夫々又船渡し七本坂とて難所の峠を通り高森へ着ぬ。

○廿二日、高森を立。けふも峠坂道にて見所もなく福川へ着ぬ。

○廿三日、福川を立。けふも勢立坂道にて、宮市へしはし休らひ、佐野峠、難所計りにて小郡へ着ぬ。

○廿四日、小郡を立。けふは吉見峠、二俣川舟渡し、船木に休らひ、夫々は上り下り坂、厚狭、市川（二十六・オ）歩行渡り、又々野立おもしろからぬ道のミにて吉田へ着ぬ。

○廿五日、吉田を立、又川渡し行く、左松山有て長府の外堀跡海辺にミえ、小月にしばし休らひ、長府の城左に見なし、川く渡り、阿弥陀寺へまふで安徳天王マツタツノ王の御木像を押し、源平合戦源平の槓・其外あるじの僧のあなひにて見せ、しばし時を移し下の関へ着ぬ。

○廿六日、昨よへよりの大雨風にて海上悪しく見合せ、晝迄に下の関を立ち直に船に乗りうつれど（二十六・ウ）雨にて海上何の見所もなくたれこめて、漸く大里へ船着ぬ。雨にてしはし休らひぬれどしきりに雨

の寶物を見せければ」(二十・ウ)

見るにさへ其いにしへそ思ひやる 此山寺に名をハ残して

敦盛の塚にまいり行程に、ひよどり越を見つゝ通り、須摩の関屋の跡をみやりて、

守すてし須摩の関屋の淋しさわ たゞ松風のこたへのミして

一の谷へしはし休らひ、舞子の濱を行まゝに松の並木波打よする気色須摩にもおとらず、詠やりて

またやみむまたみまほしと過がたき」(二十一・オ) 舞子の濱のかゝる詠めを

と行く舞子の茶屋へ休らひけるに、風涼しく行通ふ船もさまゝにて、むかひに淡路島を見やりて、

またたくひ波路はるかに見渡せば 夕日にむかふ淡路島やま

名残尽せず詠めけるに、おのこ供暮に近かき程に急き立ねといひければせんかたなく立出、大蔵谷へ着ぬ。

○十一日、大蔵谷を立。明石の浦の気色もいはん」(二十一・ウ) かたなく、

海越のやまよりそれで明石かた 浪のみるめのあかぬ朝なき

夫々高砂へ参り相生の松・尾上の鐘をミて、

千世萬代かはらぬ名さへ高砂や げに相生の松ハふりせす

此辺の海辺ひびきのなどと申けるよし聞て、

ふりにける尾上の鐘の朝な夕な ひびきのなだや澄渡るらん

夫々右え寶殿へまふてけるにけふハ思ひの」(二十二・オ) ほか道はり、日も西にかたふきぬとて急き御着へやとりぬ。

○十二日、御着を立。船渡し姫路の城をはるかに見やりて、夫より姫路の城下を通るに市中賑かなる事江戸にもかはらす。行程に鶴亀といふ所に休ひけるに、此宿に昔より鶴亀の石とて所持有。夫ゆへに名とすとて右の石をあるじの見せけるに、ちいさき石に鶴亀のかたちありけれハ」(二十二・ウ)

千世萬代齡をいしにとゝめ置て うこかぬ宿ぞ榮へひさしき 此所にて初而時鳥を聞て、

古里の人にかたらんよしもかな おりめつらしき初ほとゝぎす

所から猶めつらしき郭公 古里にしも鳴きわたれかし

けふも見所もなく有年に着ぬ。

○十三日、有年を立出、きのふに同じく見所もなく片上に泊りぬ。」(二十三・オ)

○十四日、片上を立出船渡し、藤井にしはし休み備中吉備津の宮へまふてけるに、社内廣く、神前へ拜し、御焚上のかなへ有とて参りけるに、御焚上げの内は其釜なりわたりけるもたふとき事なり。されどけふもおもしろからぬ道のミにて板倉へ着ぬ。

○十五日、板倉を立、阿部川船渡しにてけふも替りし気色もなく矢掛へ着ぬ。此宿榮翁君より御代々御休ミも有りし所にて、さまゝもてなし、あるじ風流なる人にて二階なぞへ」(二十三・ウ) あないしてみせける

たなく、まどろむ間もなく鳥の鳴きけれハおき出ぬ。○晦日、大津を立
 出けるにけふは所からみやひたる気色めつらしく、経園へまふてぬるに、
 宮居清らかにまふつる人多く賑ハひ、みやつこともあないにて神前へ
 参り伏拝ミ」(十七・ウ)

幾世をかげにもとみける諸人の 往来たへせぬ神の玉垣
 左右茶賑やかなり。夫々四条の町に大雲院とてほかり有寺ありければま
 ふてしに、院主あるしまうけてさまくもてなしぬ。此所へ古藤養真
 出迎ひぬる嬉しさ、しはしうさもわすれぬるに、供の者はや立ねと急き
 けれハ古里のことなどかたりもやらず名残おしくも立出つゝ、
 いつか又逢みむことのかたけれハ かへる袂そ立うかりける」
 (十八・オ)

さまく思ひつゝ伏見へ着ぬ。夕つかたりあめそぼふりけれと供のお
 のことも、古里もちかつきぬとてよろこひさゝめきぬ。まつこゝ迄来に
 ける祝とて人々洒すゝめなどして旅のつかれもしはしわすれ、
 古里の夢やむすはん呉竹の ふしみの里の雨のしつけさ
 といひつゝ打ふしぬ。

○四月朔日、けふは雨降りつゝきたれこめて空しく暮ぬ。」(十八・ウ)
 ○二日、伏見を立つ。船にて下るに同じく雨降そゝき、いつくもわかず。
 淀の水車八名のミ残り、八幡・山崎其外名所くも雲ふかく、
 みなれ棹さして行衛はしらねとも 帰る波路をわすれやハする
 ○三日、昨日ふに同じ。○四日、住吉へまふて宮人の案内にて忠久君の

誕生石へ参り拝ミ夫々四社御神を拝し奉り、
 うこきなき此皇の跡たれて いともかしこき四つの御社」(十九・オ)
 夫々天王寺へまふて、東照宮の神前を拝し、聖徳太子の御影を伏し拝ミ、
 経堂にめぐり如意観音の御前へ参り拝し、
 かしこしな佛の御名をとなへつゝ、うき世の夢も今そはるけん
 亀の井の水諸人祈念すと聞、立寄て
 結ふ手もたふとかりけり廻りあひて 法のうきゝの亀の井の水
 所ゝに休らひ宿りに帰りぬ。

○五日、何のふしもなくとまる。」(十九・ウ)
 ○六日、昨日ふに同じくとまる。供の者眼病多く八日迄滞在。○九日、
 浪花を立。けふは船渡し歩行渡りのミ、見所もなく西の宮へ着ぬ。○十
 日、西の宮を立出るに聞及し蛭子三郎宮大社有り。其前を通り右に楠の
 旧跡見ゆ。夫より生田明神へまふて伏し拝ミ、梶原の籛の梅を見て、
 今も猶其名の残る武士の かつ色みせし梅の栄へハ
 夫々兵庫へ休らひ行程に須摩の浦の気色と」(二十・オ) いはんかたな
 し。

写ともゑやは及はぬ須摩の浦の たくひも波のあわぬみるめハ
 折しあらハまた見まほしき朝なきに 千船をよする須摩の浦波
 行程に須摩寺へまふてけるに、ふりぬる寺のありさまもの淋しさもたふ
 とく、入口に若木の櫻・辨慶の制札有り。観音へ参りふし拝み、院主あ
 なひにて敦盛の木像、同じく和歌・青葉の笛・源亮上人の和歌、さま／＼

はるかに夕賀明神鳥居みゆる」(十四・オ) 山崎といふ所を通り、つゝ
ら町とてつゝら細工店にかさり有り。夫倉村と多く愛知川へ休らひ行程
に愛知川歩渡り、此所老そのもりと聞く。

行なやみたとくしきもけふはかく 我も老その森の下道

小畑村とかいふてななき所を通り武佐に休らふ。是より西堀川右の方明
知の城跡有り。海手に信長の古城も有と聞つゝ行程にむかひに見ゆるは
鏡山ときく、

鏡山うつさばさそな浮豚に やつるゝ影を霞へだてよ」(十四・ウ)

と行く篠原つゝみを通り、鳴海か橋とかいへるを通り、鏡の宿左はむ
かて山。夫倉歩渡り船渡し、けふは大こゝ合にて道いそき守山へ着ぬ。

○廿九日、守山を立行ぬ。けふは永き原がひ道にて見所もなく、草津へ
休ふ。此宿にて古へつまなりける人みまかり給ひければ、

見るにさへ袖そしほるゝ玉の緒の はかなく消し宿にとひきて

と心にてねんしゆし侍る折節、膳所を使してとはせたまふ恭さ。かへり
ことなと申、立出る。けふの」(十五・オ) 篠原の里の跡とてとをるに、

草木もひとつみとりに霞あひて 行過かたき野路の篠原

行程に右の方野路の玉川の跡、其外さまく名所も有ときつゝ月の輪
に休らひ、瀬田の橋を渡り、

たくひなや向ふ深山のやまはれて 霞わたれる瀬田の長はし

夫倉瀬田の橋本より石山にまふてけるに、山の気色の外の心ちして、観
音の御前にてこの世のうた」(十五・ウ) かひはるけさせ給へと祈り、

今はこの浮世の夢や覚ぬらん いし山寺の鐘のひききに

入口に源氏の間とて有。紫式部の硯とてあないの僧みせ侍るに、

諸人のきてあふらん年をへし 硯の海のふかき心を

大盤若經六百巻書きて納置たりとて、是又一巻取出しみせければ、

書き残す跡たにくちす今も猶」(十六・オ) あふことかたき石山の寺

弘法大師の刺髪にて弥陀の名号ぬひつけけるを拝みて、たふとく有難き
まゝに

とふとしな弘き御法の跡とめて 見るもかしこき弥陀の本願

又紫式部の御影を書、其うへに二首の御歌・經文有。繪師は狩野右近、

御歌は近衛殿と思へと、行先急ぬはやくと人いひければ立出。是より
行程にせゝの城見へ、鳩の海はるかに見やり、粟津の原・兼平の古跡な

と通りて打出の濱より三井寺」(十六・ウ) へまふてぬるに御本尊は観

音、左は妙見、右は愛染御前にて祈念奉り、

伏し拝む心も友に澄にけり 三井の清水の濁りなければ

夫倉舞たいへのほり見れハ、志賀・唐崎・粟津・瀬田、左にはひゑい山
みえ狂に入さゝめきけれと何といはんかたもしれず、

筆とりてかへ言のはも及はしな たゝにやむべき詠めならねバ

名残りおしくも立出、行く粟津か原を通り此間名」(十七・オ) 所古

跡さまく多けれど、つたなき心言葉にハ及かたく、大津へ着ぬれば昔
遣ひし女房此所迄出迎ひ、昔物語り等に袖をしほり、共に酒くみかはし

旅のうきもしはしわすれぬるに夜も更ぬとは立かへる名残おしきせんか

夫より右は谷川をみおろし山坂を登り行程に文字略ふしおかみ、谷屋にかゝり桶なはてとて長き所をとる。さま／＼古跡有と聞けど伏見へやすらひ直に立出行程に、太田川満水にて渡りかたしとてまた／＼伏見へ引かへし宿りぬ。

○廿五日、太田川明きぬとて己の刻ころ伏見立出るに、道悪しくと聞けどさほどの山坂もなく行程に太田川大渡しとて人さゝめきけれと難なく渡り着て、

さま／＼になかれ行手も船人は「(十一・ウ) 浮世の波に世を渡るな

り
夫より細き坂道を行程に尾州犬山の城左に見ゆる、野立さま／＼難所通り、鶴治休ふ。夫左の方は野はら右は遠山多く梅・桜・桃・山吹さま／＼の花咲ましへたるもめつらしく、景色いはんかたなし。

散はてし花もさま／＼咲つゞく かゝる詠めも旅ならバこそと打詠めつゝ加納にやどりぬ。

○廿六日、加納を立出るにけふは道もたいらかにて「(十二・オ) 歩行にて行まゝに村々井木多くはるかに因幡山見る。松としきかハと行平のし所なりと聞きぬ。

峯におふる松もかひなし旅衣 立帰るへき程をしらねバ
何渡川難なく渡る。河度に休ふ。夫右歩渡川橋多く左右村多し。是より又々道悪しく、久世川大垣の城よりみもてなし船出る。難なく渡し、左に大垣の御城みゆる。土手道左右打ひらき田畑川／＼多し。熊坂のもの

見の松有り。爰に長」(十二・ウ) 者屋敷跡・朝長の墓所・さま／＼古跡あり。行過、野上川歩渡り是より坂、垂井へやすらひ、夫右野上の里、名所ときけと今は廣き原にてさま／＼の草木のみしけり、はるかに見渡せば鶴籠山の跡も有ときく。古へを思ひやりて、

古へを思へはいと、過かたき 野上の里の春の夕暮
いとあはれに詠めつゝ関ヶ原へ着ぬ。

○廿七日、関ヶ原を立出るに左の方に古城の跡有り。右の方は関ヶ原合戦の時の首塚有と聞き、行まゝ」(十三・オ) に不破の関屋の板ひさしの跡とは有るを見て、

板庇あれにし後と聞にさへ 淋しさそふる不破の中山

今須へしはし休らひ行程に、又山、坂、谷にて道悪しく、寝ものかたりの橋とて美濃と近江の境と聞くにとなりよりも近く、けにもと思ひつゝ行過、柏原へ休らひ又左右谷川をとふり、原、村／＼さま／＼古跡有と聞けと行過る。又山坂道悪しく摺斗峠ママ、針ノ掛茶屋にしばし休らひ詠めやるに、只嶋ママ、舟掛の海つら廣く見渡し、左にやきと云」(十三・ウ) 出島は竹生島をはるかに伏しをかみ、霞める空もいとゞけよふを催し供の者もさゝめきしばし時をうつしぬ。

たぐひなや見渡す山は打霞ミ さゝなみよする鳩のうら風

夫右鳥居本へ休ひ行程に道もよく、小野の細道などいふ所を通り歩渡川も有。此所にもさま／＼古跡ありときけと忽高宮へ着ぬ。

○廿八日、高宮を立出るに道もよく、高宮へ着ぬ川歩渡、高宮中程より

行程に道もやすらかにて、福島の御関所も前の」(八・オ)ごとく難なくとをる。是よりは又高山峯をならべ左は岩石するどにして大河みなぎり、何といはんかたもなくかろうじてけふは上松に着ぬ。

○廿一日、上松を立けるに雨降り出し、おしなべ松原にて又雨の気色もよく、細き道をとをり寢覚のとこ村へ出、是より寢覚山臨泉寺といふ寺へ参る。床に浦島の釣の影とて墨絵にてあり、めつらしき釣竿も有り。庭より寢覚のとこを見おろし、気色残りなく見へ渡り小松多、さまぐの草花みだれ、浦島が釣場の石ども、屏風石・つゝ岩・しゝ岩・釜石・小釜石」(八・ウ)などいふて名石多く、河原に姫小松といふ名木あり。其下に弁才天の社有けれど雨にて参りもやらず、雨の気色も一しほ詠めつゝ、

めもはるに心こと葉もおよはじな 寢覚の里の四方の詠めは
夫より沢原にしはし休らひ行程に大ひなる板のとのほり、此所もさまぐ古跡ありときけどこみあふまゝ道急ぎ野尻へ着ぬ。○廿二日、野尻を立けるに、けふは天気よく左に駒ヶ嶽はるかに見へ、かけ橋多く、かりん坂・かすへ坂などいふ難所をとふり御殿へしばし」(九・オ)休らひけるに、江戸を立出初て鶯の啼ければ、

時鳥なくへきころも信濃路ハ また春浅き鶯の聲

と行くつまこ峠を越行は木曾の城跡とて高き山有り。左は木曾の川流れ只山坂のみにて、妻籠へ休らひ、是迄竹なしときけど此前は大藪大竹多く、行程に又大石・大岩・谷ぐ・坂・まこめ峠・こはらしき道。是

先きは猶深山と聞く。いかにとあやふみなから行まゝに、山坂難所なれと下り坂多く、しはしおそろしさもすく漸く中津」(九・ウ)着ぬ。是より美濃路と聞くに坂の上に神の鳥居の見へければ、

しなの路や山またやまを越きつゝ 身の行すゑを願ふ神垣

やどりぬれば苗木の城より使して消息あり。使の者へ逢ひまのあんび文二而打かたりあひ旅のうきもしはしわするれ、夜も更けぬれば打ふしぬ。○廿三日、苗木へ文かへりことなと認め、中津川を出立。苗木の城はるかにみやり行程に亦山峯道をのみとをり、大井にしはしやすらひ、行く難所のみ」(十・オ)よくも来にけるものかなと詠めやりて、

古里のかたはいつこか白雲の 幾重の山を立へたつらん

是より又山中にて左に御嶽山見ゆる。右の方に西行の塚有ときけどいそぎ大久手へ宿りぬ。夜に入雨になり、山より吹おろす風寒く、ふしぬれと夢もむすばず。

かり枕物思ふ宿に聞あかす 雨にもいと袖は濡けり

○廿四日、大久手を立出るにけふも雨にて山中いとど」(十・ウ)道悪しく、ひわ坂・ひわ峠ことぐしく越し行に、一つの岩といふ大巖石有見る、始て大きな事いはんかたなし。此所にて加賀の白山はるかに見ゆる。追ゝ雨もやみ細久手へしはし休らひ、又山坂のみ難所をとをり、右の方は田畑多、苗代ときとて賤か種まくありさまを見やりて、

賤の男かかへす田面ははるくと 末たのみある春の苗代

見てはしる苗代時と賤の男の 種まく小田の心尽しを」(十一・オ)

左右焼石つみ重ねて土手のごとく、やゝ行程にみませ峠とかいへる難所を通り只山道のみ、又、はかな」(五・オ)ひか原とかいふて名所も有り。是よりはいとゞさびしく、ちくま川を渡り、八幡宮をふしおがみ、けふは八幡に泊りぬ。○十六日、八幡を立。けふも峠坂多く、左の方は谷く村く多し。南の方はおぼ捨山、西はさらしな・田毎の月などいふ名所有りと聞けと道遠く参りもやらず行過。夫より望月といふ所にやすらひ、

今も猶千世の古道跡とめて あふくも高き望月の駒

行まゝに又雁とり峠といへる難所を越へ、山坂道悪しく長久保へ着。○十七日、長くぼを立けるに」(五・ウ)けふもまた坂道谷川すさまじき所なるに雨降り出し風の音もはけしく、中和田といふ所にしはしいこひけるに、此所のあるじ祖父の代より石を好み、さまくの名石数かきりなく飾り、有りたる屏風にも石の詩歌さまく有りて、ゆるく見まほしく思へとも雨風いよく強くなりし俣に急き立ねと人いひける俣にせんかたなく立出けるにいとゞ雨風はげし。和田峠にかゝりけるに左右白雪おひかさなり寒きこといはんかたなく、行先も見へわかず、駕籠のすだれたれこめ風ませに雨降り」(六・オ)そゞき、白雲を分登り行。

和田の山越行まゝに亦山坂、鳩のむねといふ峠あり。空晴れたる時は富士山見ゆるといへど雲深くけふは見へず。山の下に諏訪の池も見ゆるといへともあやなく行過、からうじてけふは道急きける程に昼頃下の諏訪に着ぬ。程なく雨も晴ぬ。此所温泉ありとて旅人も入湯すとて我宿入を

す。はたかなる人見物するもおかし。○十八日、諏訪を立。大明神へ参詣し行末をいのり行けるに、寒気はけしく塩尻峠を越行。此所より諏訪の池はるかにみゆれども、霞わたり」(六・ウ)てよくも見へず。爰に暫くいこひ行程に、桔梗ヶ原にやすらひ、古戦のことと思ひやられて、

見るに猶其古へを思ひやる 桔梗ヶ原の過し世かたり

けふは洗馬に宿りぬ。○十九日、洗馬を立出るに左右細道ありて川橋多く、桜澤といふ所に休らひぬ。此所に杭有、是より木曾と書付たり。けふは難所もなく人々よろこびけれど、みはやす気色もなく行程にさきつかひぬとて、急きならひへ宿りぬ。○二十日、奈良井を立出けるにけふは山の間のミ」(七・オ)とおる。此辺は竹一切なしときく。夫より鳥居峠、右のだけはしき坂。右は木曾川流れ左は木曾の掛橋有しときけど、平地のやうにてちいさき板を掛けしのみなれば、

つてに聞木曾の掛橋名のみして 渡るもやすき御代の恵に

と打みやりつゝ行程に亦川有。これは味吹川とかいふ。やぶ原にしはし休らひぬ。是より別而深山にて高根には雪所々に残りあれと」(七・ウ)

春と見や雪は高根に残れとも 風さむからぬ木曾の山道

行く木曾の川音すさまじく大石小石見おろしとをるもおそろし。

聞きつゝも越行山のあやうさは げにおそろしき木曾の川音

折節松の虫とかいへるか鳴きければ、

旅人の往来を松のむしの聲 所からにや哀とはきく

古里になかめすてにし花なれと 折めつらしきすみれたんぼ、
行程に戸田川船渡しとて人々さゝめきければ、

立帰ることしもあらは浮世をも いとはしものを戸田の川波
向ひの岸に着て、わらひにやすらひ」(二・オ)

所からおりめつらしく休らへと 名のみわらひの春もかひなし
こよひは上尾にやとりて、

聲をあけをくれさきたつ諸人の とまりあらそふ宿そかしまし

○十日、上尾を立出けるに雨降り出し道もはかとらす、殊更にこみあふ
まゝにさまゝの所に休らひ、こよひは何方に宿からんと人々さまよひ、
からうじて鴻の巢といふ所のあやしき寺にやとりぬれハ、雨はいよく
降りくらし四方の」(二・ウ) 気色も分かたく、さまゝかたりあふう
ち入相の鐘かすかに聞え打詠めんもあやなき心地して櫛の戸さしけれど、
人々襖かつくこともならぬせばき所にて、其俣打伏し旅の浮寝をかたり
あいつゝまとるむ程にはや明ぬ。○十一日、同じく雨降りくらし何方も
見えわかず、熊谷江やどりぬ。右の方に蓮生山熊谷寺といふ寺有。是ハ
蓮生法師の住ける所ニ而木像等有ときけと雨も降り道もいかゞと参りも
やらず。

今も猶たふとかりけり蓮葉の」(三・オ) 濁りにしまぬ名をは残して
○十二日、熊谷を立出けるに空いとはれわたり、霞渡れる気色めもはる
かにいはんかたなし。されと日毎に古里の遠くなり行まゝに、

春霞立別にしその日さへ しらぬ野山のうへにかそへつ

行く本庄にやとりぬ。○十三日、本庄を立。けふは、歩行渡・船渡し
多く、かゝす川にてはまやはしの城主よりもてなし船出、ことなく渡り
ぬ。夫より杉井木の間程遠く行まゝに佐野源左エ門」(三・ウ) か屋敷
跡、佐野の船はしの跡もふりぬれと有と聞て、

思ひきや其いにしへもしのはるゝ 佐野のあたりを通ふへしとは

今よひは安中に宿りぬ。○十四日、安中を立出るに左にめうぎ山はるか
に見へ、左右の山くくに立のぼる雲は烟のごとし。松井田といふ所にや
すらひ、鉢の木の謡に有りけるもこの所なりと思ひ

千世までとちかひかはらで今も猶」(四・オ) その名ふりせぬ松井田
の宿

行程に横川の関有り。爰は東より通る人々を改る関ときけどこたびはあ
らためもなく通り坂本といふ所にやすらひぬ。是より左右山のみにて、
うすひ峠、此所ねはん石とかいふて難所ときけと難なく登り、峠の茶屋
にしはしいこひ、むかひの山の峯続き見ればちいさき鳥のように柴人の
通ふを見て、

飛鳥のつばさおよばぬ嶺にだに 浮世わたりと通う柴人」(四・ウ)

しばし駕籠の内にて熊野権現おふしおがみ、軽井澤へ宿りぬ。○十五日、
かるひ澤を立。是よりは野原山道計りにて寒気はけし。されど霞渡れる
空の気色いはんかたなし。供のおのこ右に浅間山みゆといふまゝにすた
れかゝげてあふき見れば、遠近人のみやはとかめんといひしもことはり、

浅間山聞しもけふとたつ烟り 遠近人も過かてに見ん

文久三年三月八日江戸を発木曾路を歴て大阪に出、中国九州路を旅行して五月十三日佐土原に帰り城内に別館を造営して是に居し百萬歳の寿齡を保つ

とあるので天寿を全うしたものと思われる。

凡例

- (1) 翻刻に際しては、読解の便をはかって、句読点を施した。
- (2) 仮名遣いは原本通りである。濁点の有無も原本通りとした。
- (3) 翻字の書体は、仮名はすべて現行字体に直し、漢字は原則として原本通りとした。
- (4) あきらかに誤りと思われる部分には(ママ) 或は(ママ○○ノ誤リカ)と脇に付した。
- (5) 読解の便をはかって、日付をゴチック体とした。
- (6) 丁付は「(一・オ)——一丁表——」という通例の表し方をした。

〔翻刻〕

〔外題〕

江戸下り

島津随真院道中日記 全

〔扉〕

江戸下り
島津随真院道中日記 全

(本文)

道中日記

随真院様(第九代忠徹公
奥方忠寛公母堂) 文久三年三月八日江戸御引払御下向之節道
中御自分の日記なり』

こたびおほやけの仰も有りて文久三年やよひ初の八日住馴し武蔵野の江戸を立出けるに、空の気色の霞渡りうらゝかなからさすか名残のおしまれて、

武蔵野ゝ春の気しきもけふのみと 見かへる空に霞へたてそ」(一・オ)
行まゝに雁の鳴きければ

かきかはす傳のみ待てと古里の 人につけてよ雁の玉章
程なく高田という所にしはしいこひぬるに、年ころ召遣つたひ送りける嬉しさ、其俣しはしかたらいかれないなとしたりめけれと只涙のみ出ければ、少しも早くと人ゝにそゞのかされ出行程に暮頃板橋の宿りに着ぬ。馴ぬ旅寝のうき枕、されとしはしはとてまとろむ間もなく、けふは道こみあふまゝはやく立ねと」(一・ウ)といそぎければ出ぬ。○九日、けふも空晴れ渡り左右は原打続き、めなれぬ所も珍らしくえもいはぬ草くの中、すみれたんほゝみたれ咲を見て、

事はさる事ながら、雪雨になやまされた和田峠の描写などに切実さを
みせ、三月廿三日中山道細久手辺で苗代を作るのを見たが九州路に入り
五月二日三日、瀬高では早苗とり、山鹿あたりでは雨の中の賤が田植
うるを一しおの感慨をもってみている。また更に国境の標記や特に中和
田・寝覚の床村・鶴亀石等の岩石には強い関心を寄せているのもおもし
ろく、屏風の詩歌連俳等にも強い関心を寄せているのは、その育ち教養
の程をしのばせるものであろう。

中山道・西海道・九州路の道順を略記すると次の如くである。

板橋・上尾・鴻の巣・熊谷・本庄・安中・軽井沢・八幡・長久保・諏
訪・洗馬・奈良井・上松・野尻・中津川・大久手・伏見・加納・関ヶ
原・高原・守山・大津・伏見・住吉・西宮・大蔵谷・明石・姫路・吉
備津・板倉・矢掛・神名辺・三原・西条・広島・宮嶋・高森・福川・
小郡・吉田・下関・小倉・黒崎・直方・飯塚・山家・宰府・松崎・瀬
高・山鹿・川尻・日奈久・佐敷・水俣・大口・栗野・小林・野尻・高
岡・六ツ野・水落坂・佐土原着。

なお随真院の佐土原帰国については

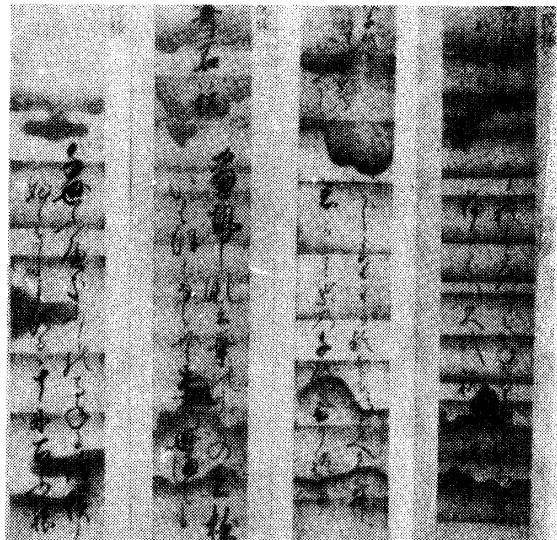
(文久三年五月)

○十三日母公随真院江戸ヨリ帰ル。家老樺山舎人之ニ陪ス。是ヨリ前
キ三月八日江戸ヲ発シ東海・山陽・西海ノ三道ヲ経テ肥後ノ水俣ヨリ
薩ノ大口ニ入り高岡ヲ過キ此日佐土原ニ帰ル。公用人牧野田源兵水俣
ニ迎フ。更ニ側役能勢真陳ヲ同所ニ遣ハシ母公ノ為メニ宮室ヲ営ム。

末ダ功ヲ竣ヘス牙城ノ奥燕室ヲ以テ仮居トス。仮居狭隘ナルヲ以テ母
公ノ不満ナランコトヲ恐ル故ニ真陳ヲ之ヲ謝セシムル也

(『佐土原藩譜十四忠寛公上』)

と記されている。間もなく住居が完成したものである。その喜びを次
の歌に詠んだ自筆短冊が同じく宮崎県立宮崎図書館に所蔵されている。



心を尽させたまひし新
宅に移りてかたしけな
さの余りに

うれしさをつゝみかねける
殿つくり移りていく代祝ふ
袂に

また同じく他に次の短冊三
枚も現存している。

寄石祝

尽せし言葉のうみの玉柏
いはほとならむ末の世まで

千世ふへきふしの高ねに降積しふゝきによする千舟石ふね

八千代もとありし御言葉の御かへしに

ことしよりわか齢をものばへ見む 君かこと葉の千代にひかれて

その没年については分明でないが『鶴城譜略』には

冠、又四郎忠施と称したが、同七年七月二十六日病えて医療の驗なく遂に西刻三田邸に逝去した。十七才であった。そして三年後の天保十年、夫君忠徹公は参勤の途上、草津に於て病のためにはかなく世を去った。作者三十九才の時であった。記録によると

忠徹公為参勤三月朔日 佐七原を発。四月七日近江国鳥居川に至り病を発す夜同国

草津驛に宿す。病愈進て医官術を失ふ、亦膳所の城主本多下総守康禎

藩医富永左中を招て是を監せしむ。終に驗なし。八日曉に至て病尤篤

し。(中略)五月廿六日江州草津驛に逝す。享年四十三徳元院殿眞譽

實道鶴山大居士と諡す。六月廿五日。陪從柩を奉して草津驛を發草津 驛者

田中七左エ門の家に宿す。七左エ門性実昧にして尤懇情を思はず故に永世塵
米拾俵を賜ふ

七月十一

日武州江戸に至り下谷幡隨院に葬す又遺髪を佐土原高月院に葬す。牌
を同寺に置。文久三年癸亥十二月廿九日遺骸を佐土原高月院に帰葬
す。

(『鶴城譜略 六』)

と記されている。

忠徹公亡き後第二子忠寛公がその後を継ぎ随夫人はその黒髪を断つて
随眞院と称した。その後江戸に留ること二十三年、作者六十三才の文久
三年三月八日、公の許をえて江戸を後にした。本書はその旅中日記であ
る。物にふれ事に感じ、地名によせては歌を詠んでの旅日記である。旅
中歌は七十二首に及び、堪能なよみぶりを見せている。又文章も素直な

表現で、当時の女流としてはしっかりしたものといえよう。

亡夫の遺骸の帰国に先だつての、作者にとっては故郷江戸を後に、夫の国に引きあげるといふやむをえざる目的をもった、しかも天候、スケジュールに制約され、勿論主導権を従者にまかせての旅であったが、許される限りその道中の名所旧跡・歌枕等を見物している。その置かれた境遇の相異にもよるのであろうが、昨年紹介した『あづまのゆめ』にみられた如き抒情的内面を押し出した女性特有のじめじめさはない。やはり旅は憂きものとの認識は根強くあるものの、また男性の道中記に比しては内容にとぼしく、視野もせまいものの、道中の風光、見聞に徹して作者なりに楽しんでいる体である。江戸に生れ江戸に育った作者にとって田園山地の風光はそれ自体珍しく、見るもの体験するもの一つ一つが、旅の憂きを感じつつも時には単調な野に飽きつつもなお新鮮で、強烈で興あるものであったろうし、またこの傾向は一面やはり旅に対する時代的な考え方の反映とみるべきでもあろう。

亡夫忠徹公の最後の地草津に於ても

○廿九日、守山を立行ぬ。けふは永き原がひ道にて見所もなく草津へ休ふ。此宿にて古へつまなりける人みまかり給ひければ

見るにさへ袖そしほるゝ玉の緒のはかなく消し宿にとひきて

と心にてねんしゅし侍る折節膳所を使してとはせたまふ恭さ。かへりことなと申立出る。

と淡々とした態度で記されている。また道中、石山や三井寺の記事に詳し

本書の存在を最初に御紹介下さった日高次吉氏併びに翻刻を快く御承諾下さった宮崎県立宮崎図書館当局に対して篤く御礼申上げたい。

道中日記 一六、二cm×二三、七cm 写 一冊

黒地に銀砂子紙表紙。左肩題簽に「江戸下り島津隨真院道中日記 全」とあり、扉にも同様に記す。内題『道中日記』。楮紙薄様墨付三十二丁。一面十行書。歌は本文より一字下げ、二行書き。

ただ本書は大正十五年五月臨写になるものであるが、佐土原島津家本を直接臨写したものであろう旨であり（日高氏蔵本附記による）すでに本書の親本——おそらくは祖本——の存在が行方知れずなっている現在貴重な資料である。なお他に本書を親本として、昭和六年に書写された日高氏蔵本（日高次吉氏御尊文故徳太郎氏書写本）が一本存する。

作者は前述の如く第九代佐土原藩主忠徹公夫人で、公の歿後隨真院と呼ばれた女性であるが、『鶴城譜略』及び『佐土原藩譜』の記事を参照しつつ作者について見、いささか作品についても触れておきたいと思う。

作者は、薩摩藩主斉宣公第四女として、享和元年（一八〇一）七月十三日江戸に生れた。母は奥州二本松の城主丹羽加賀守長貴養女である。

文化十三年二月二十一日、第八代佐土原藩主忠持公長子忠徹公（寛政九年八月二日江武美田邸に誕生。母は英祥院。薩摩中將重豪養女、島津兵庫久徴の女。筑後守、後飛驒守と改む。）との婚礼の儀ととのい、御輿入

れした。

『藩譜』卷十三には

十三年二月二十一日公薩摩中將齊宣主ノ女ヲ娶ル名ヲ隨子ト曰フ。二十八月登營ノ婚姻ノ礼ヲ述フ。是歳三月八日太公致仕シ公家督ヲ承ケルナリ。時二年丁二十ナリ。と記されており、時に隨姫十六才の春であった。そうして作者は江戸の奥方として忠徹公との間に三男六女をもうけた。

文政元年十二月十三日 厚子誕生

三年七月五日 嫡長子 萬之進誕生

五年七月十二日 樂子誕生（夭折）

七年六月廿七日 勵子誕生

九年三月十一日 （長シテ伊達若狭守宗孝ニ嫁ス）

美子誕生

十一年二月九日 （長シテ遠山美濃守友祥ニ嫁ス）

十三年十二月十四日 忠寛公誕生

天保三年六月十五日 良子誕生（夭折）

保之亟誕生

七年五月十二日 （後宮原摂津守義直ノ義子ト為ル）

準子誕生

嫡子萬之進は、天保五年四月廿九日元服し、齊彬公を三田邸に招き加

- 4 伊予切 一軸
- 5 山崎宗鑑翁短冊 一軸 (4・5は宮崎県総合博物館蔵)
- 6 俳諧素玄問答 大本 上巻一冊(天保十二年冬頃刊)・中巻一冊写 (延岡市 嶋津正夫氏蔵)
- 7 俳諧素玄問答 大本写上巻一冊 (以上は『研究年報』第二号に掲載) (豊中市 中村幸彦氏蔵)
- 8 五木庵五木短冊 三枚 (延岡市 嶋津正夫氏蔵)
- 9 雑々記 大本 写一冊 (都城市立図書館蔵)
- 10 古今集注 大本 写一冊 (延岡市 神原泰雄氏蔵)
- 11 樋口種実旧蔵本 二十六点 (宮崎県立総合博物館蔵)
- 12 あつまのゆめ 写大一冊 (鹿児島県立短大蔵)

(以上は『研究年報』第三号に掲載)

今回は以上にひき続き、佐土原の紀行文と薩摩の雑俳資料を中心に紹介したい。ことに今回は、俳諧研究に御専門の大内初夫(鹿児島大学)・福山武徳(枕崎高等学校)の両先生に御助力を得ることができた。前にも述べたように、文学資料と一口に言っても時代やジャンルによってわれわれの守備範囲をこえるものが多い。従って、テーマの「地域の生活と文化に関する共同研究」の推進にあたっては「共同研究の横の連繫をさらにこえて、郷土史家の方々、各学校の先生方、公私の図書館、文庫、あるいは一般の方々へ御教示を仰ぎたい」旨を明らかにしておいたわけである。このようなかたちで御協力を得ることができて、共同研究

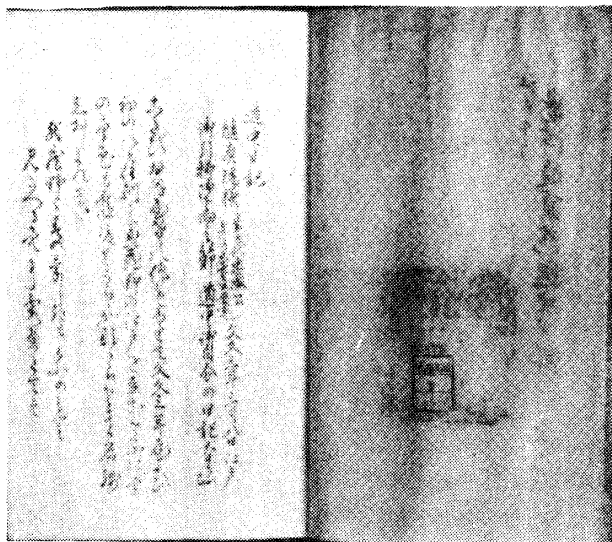
の成果を一層充実したものにできると信ずる。

郷土を愛し、郷土の「生活と文化」をより正確に理解するために研究協力、資料提供を惜しまれなかった諸先生・各位に心から感謝する次第である。

※ ※ ※

資料翻刻

『道中日記』 (江戸下り島津隨真院道中日記)



宮崎県立宮崎図書館蔵

昨年、郷土の生んだ女流の作品として旅日記『あつまのゆめ』(鹿児島県立短期大学蔵)

——三代佐土原藩主島津久雄夫人興正院の作——を翻刻紹介したが、今年も引つづき佐土原藩第九代藩主忠徹公夫人隨真院の、文久三年三月八日江戸を発ち、中山・西海・九州路を旅して五月十三日佐土原に至る旅日記、宮崎県立

宮崎図書館蔵『道中日記』を翻刻・紹介させていただくこととなった。

南九州の国文学関係資料 (三)

調査と研究

はじめに

「地域の生活と文化に関する共同研究」の一環として「南九州の国文学」に関する「調査と研究」を進めてここに三年目の成果を発表することができると喜びとする。「調査と研究」は同時に進めているつもりであるが現時点では埋没資料の発掘・調査こそが今日の急務であることを前回強調した。文学資料の蒐集・紹介・翻刻を通じてまずは原資料の内容に直接に触れ、そこからそれを生み出したわれわれの先人たちの文学・学芸についての意識や、文学環境としての地域社会を理解し考察することができる。いうまでもなく作品にあらわされた言語を通じて先人たちの心に触れることができる。その作品が消失したりすることを防ぎ、共有することによってはじめて、文学作品の研究が可能となり、より多くの人の目を通して客観的に考察することができよう。資料調査と作品研究は一体のものであり、それを生み出した人間と環境はまた作品を通して伺い知ることができる。前回「調査」と「研究」との進め方について、資料調査に全力を注ぎこむべきだと述べたのは以上のような意

塩谷 充夫 若木 太一
福井 迪子
(執筆協力者)
大内 初夫 福山 武徳

味である。文学に関する資料の「調査と研究」とはとりもなおさず文学研究そのものである。文学に関する重要な基本的研究であるとともに、作品についての史的な位置づけをも目途した総合研究に繋がるものである。まとめていうなら、「地域の生活と文化に関する共同研究」という広いワクの中で文学に関する試みを通じて、文学作品個別の研究とそれを生み出した階層、人脈、環境、あるいは機関や印刷技術などといった広範な視点を据え、地域社会の歴史の中で総合的に考察してみようというのが目標である。その場合、中央の文化や文学史、あるいはジャンルの隆替などに見合せ比較しつつ、地方文学というものを考えてみるべきはもちろんのことである。

さて、前回までの資料調査、考証は次の通りである。

- 1 詞花和歌集 卷子本写 上下二巻 (宮崎市 泉 房子氏蔵)
- 2 新後撰和歌集 大本写 上巻一冊 (宮崎県総合博物館蔵)
- 3 伊勢物語 大本写 一冊 (「宮崎神宮蔵」宮崎県総合博物館蔵)